Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

「笹川杯訪日団 2023」
訪日感想文集

公益財団法人日本科学協会
業務部 国際交流チーム

目　次

★団長・引率者（2 名）

団長

浙江越秀外国語学院　東方言語学院　院長　邱　鳴・・・・　4

引率者

社会科学文献出版社　国営セクター地域局　編集長　高明秀・・・・　5

★「笹川杯全国大学日本知識大会 2023」（17 名）

天津外国語大学　日本語学院　日本文学　修士 2 年　楊博宇・・・・　7

天津外国語大学　日本語学院　日本語学部　4 年　馮焱鈺・・・・　8

天津外国語大学　日本語学院　日本語学部　4 年　董剣菲・・・・　9

浙江大学　外国語学院　日本語と日本文学　4 年　董潤高遠・・・　10

浙江大学　外国語学院　日本語と日本文学　修士 1 年　高一笑・・・・　11

南開大学　外国語学院　日本語と日本文学　4 年　金戌舉・・・・　12

南開大学　外国語学院　日本語と日本文学　修士 2 年　樊行雯・・・・　13

南開大学　日本語学院　日本語学部　3 年　賈昕怡・・・・　14

中国人民大学　外国語学院　日本語と日本文学　修士 1 年　陳心語・・・・　15

中国人民大学　日本語学院　日本語学部　3 年　滕俊淞・・・・　16

中国人民大学　日本語学院　日本語学部　3 年　蓝雅琦・・・・　17

河南師範大学　日本語学院　日本語学部　4 年　黄旭鴻・・・・　17

浙江越秀外国語学院　日本語学部　4 年　管億嘉・・・・　18

北京外国語大学　日本語学院　日本学研究センター　修士 2 年　周宇豪・・・・　19

上海海事大学　日本語学院 日本語学部　4 年　朱泳康・・・・　20

武漢大学　日本語学院 日本語学部　4 年　辛　宸・・・・　21

聊城大学　日本語学院 日本語学部　4 年　王　欣・・・・　22

★「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2022. 2023」（日本語版）（8 名）

2022 年受賞者

福州大学　外国語学院　日本語学部　4 年　林子晗・・・・23

四川軽工業大学　日本語学院　修士 1 年　王云樵・・・・24

北京外国語大学　日本学研究センター　修士 1 年　張佳瑜・・・・27

北京第二外国語学院大学院　日本語学と日本語教育　修士 2 年　劉力畅・・・・27

2023 年受賞者

上海交通大学　外国語学院日本語学部　3 年　馬銀炫・・・・29

広州大学　日本語学院　日本語専攻　3 年　劉詩穎・・・・29

四川外国語大学　日本語学院　日本語専攻　3 年　李湘蓮・・・・30

北方工業大学　外国語文学　修士１年　蘇竟月・・・・31

★「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2022. 2023」（中国語版）（8 名）

2022 年受賞者

暨南大学　文学院　漢語言文学　3 年　譚碧雅・・・・33
雲南大学　文学院　漢語言文学　修士 2 年　王一冉・・・・34
武漢大学　弘毅学堂　弘毅学堂　4 年　白礼文・・・・35
雲南大学　文学院　比較文学と世界文学　修士 3 年　李関月・・・・36

2023 年受賞者

寧波大学　人文メディア学院　中国語文学　修士 1 年　潘俊杰・・・・38
南開大学　外国語学院　日本語学部　3 年　王奕博・・・・39
北京大学　哲学学部　中国哲学　3 年　王敬淇・・・・39
南京工業大学　法政学院　行政管理　1 年　楊東林・・・・43

★「笹川杯日本研究論文コンクール 2022. 2023」（5 名）

2022 年受賞者

清華大学　人文学院　外国語言文学学部　修士 1 年　李　鋭・・・・45
北京外国語大学　日本語学院　日本語　4 年　白易之・・・・46
上海交通大学　外国語学院　日本語学部　4 年　胡凌鋒・・・・46

2023 年受賞者

上海交通大学　外国語学院　日本語学部　4 年　王璐児・・・・47
吉林大学　外国語学院　日本語学部　3 年　譚小妍・・・・48

★「Panda 杯 全日本青年作文コンクール」OG 訪日団同行メンバー(4 名)

獨協大学　国際教養学部　言語文化学科 1 年　金場ノエル・・・50
同志社女子大学　表象文化学部　英語英文学科 1 年　田中　玲名・・・50
立命館大学　文学部人文学科 4 年　望月　　泉・・・51
岡山大学大学院社会文化科学研究科日本・アジア文化専攻 2 年　高野かずみ・・・52

★団長・引率者（2名）

感想文

団長
浙江越秀外国語学院
東方言語学院　院長
邱　鳴

（原文中国語）

笹川杯受賞学生訪日団の団長として、8日間の日本の旅で多くの収穫を得ることができました。まずは、中日の友好に対して自信を深められたということです！中日関係が氷点下にあるこの環境にあって、これほど多くの日本の友人が中国に触れ、中国を知り、中国を理解しようとしていることは予想外でした。数十年前、民間が国を動かす運動により中日国交正常化が促進されましたが、今もなお私たちは「中日好友」によって「中日友好」を促進する必要があります。この点で、笹川杯やパンダ杯などの事業は、両国の学生が相手国の言葉を身につけ、文化を理解することを可能にしただけでなく、両国の若者が「好(よ)き友」となることを可能にし、結果として中日「友好」の促進に繋がったと感じています。

8日間の日本滞在の中で最も印象深いのは、やはり日本の友人との触れ合いです。初日の夜の歓迎会での高橋会長のご挨拶から、中国の大学生訪問団に対する心からの歓迎と中日の青年の交流への熱い期待が感じられました。2日目には大島前会長一行と懇談しました。80才を超えた高齢の大島前会長は私達を歓迎する宴席を設けてくださいました。かつて大島前会長と大澤理事長は、立教女学院を代表して本学へ8万冊の図書の寄贈を決定され、その一部は本学図書館に届いております。8万冊は膨大な冊数ですが、発送作業や輸送に係る費用は全て寄贈者側の負担となります。会合が終わると、寒風の中で彼女たちは手を振って、バスが遠ざかるまで私たちを見送ってくださいました。彼女たちの情熱、優しさ、中国に対する友好は私たちを感動させ、1970～80年代の中日友好の情景を感じさせました。3日目は尾形理事長がご多忙な中、お時間を割いて招待してくださいました。尾形理事長は徳望が高く、1980年代から何百回も中国を訪問し、中国の党と国家の指導者の接見を受けたこともある、中国人民の古くからの友人です。談話の中で中国に対する彼の深い思いを感じることができました。彼は中国が好きで、中国がますます良くなることを望んでいると仰っていました。両国の国民、特に青年はもっと多く交流すべきとのことで、彼は笹川杯の受賞した学生が訪日するイベントを応援されているのです。尾形理事長、高橋会長、大島前会長は一世代上の人物で、中日の友好をより深く理解されており、さまざまな形で努力をされています。彼らの努力により、今後きっとより多くの中日の青年が良い友達になると私たちは信じています。

一方、こうした傾向は若い世代の人々にも見られます。例えば山下智博先生、ワークショップに参加した日本の学生、民泊体験のホストファミリーは留学生の到来に強い情熱を持っていました。特に民泊のホストをしている若い奥さんは、茶道のお点前を披露するとき学生たちに説明して、その日の茶会のためにわざわざ赤い茶筒を用意してくれました。赤は中国の国旗の色に近く、日本の国旗に含まれる色でもあるからとのことでした。家にある掛け軸

も橋を主題としたものを選んであり、中日の友好の橋が永遠に滞りないことを象徴しているのだそうです。彼女の話には大変感動し、思わず王安石の詩にある「浮雲に望眼を遮らるることを畏れず」という言葉を想い起しました。笹川杯などの中日双方のこうした民間交流活動、中日の各世代の共通した努力を通じて、中日関係は最終的にきっと風雨の後の虹を迎えるでしょう。

改めて顧先生、阿羅先生、宮内先生のご尽力、心からのご配慮と中日の友好のための貢献に感謝を申し上げます。

2024 年 02 月 29 日

訪日の雑感

引率者
社会科学文献出版社
国営セクター地域局　編集長
高明秀

（原文中国語）

大学時の専門は国際関係で、日本の近現代の国際関係に関する書籍も少なからず読んできました。就職してからも地域や国家に類する書籍の出版に関わっているため、日本に対する関心が断たれたことはありません。黒船来航から明治維新まで、「失われた十年」から「高齢化、少子化」問題まで、『菊と刀』から今の日本の若者の「低欲望」状態まで，川端康成の『古都』から東野圭吾の『白夜行』まで、近代以来の日本についておおむね理解してはいましたが、百聞は一見に如かず。日本を訪れて本当に心が動いたのはディテールで、深く心を打たれ、長らく気にかかっています。

日本の路上にはゴミがありませんが、ゴミ箱もありません。繁華な新宿や渋谷の街でさえ、ポリ袋や吸い殻などは見られませんでした。これは日本の厳格なゴミ管理規定と不可分だと思います。日本政府はゴミ管理を系統立てており、社会全体がゴミの定義、発生、分類、廃棄、民衆の認知や宣伝などの面で整った管理がされていて、環境保護の重要性を強調しているため、普通の人が小さい頃から環境保護の重要性を意識しているのです。一方で、日本の国民性とも切り離せないのではと感じています。中華時期に、中国の学者は中国の「国民性」に対して広範で深い探求を行いました。梁啓超、林語堂、魯迅いずれにも有名な論述があります。では、日本の「国民性」の特徴に関してはというと、こちらも近代以来の日本の学者に多くの論述があります。「全体性の価値観」、「自律+高度な服従」は日本の「国民性」の重要な構成部分のはずです。これらの国民性特徴により、日本の民衆が多くの事物において思想と行動の全体一致性を見せているのです。ゴミの管理という事物から「一斑を窺ひて全豹を知る」ことができます。

日本の町中には漢字が多く、歴史の上で中日両国が広範で深い付き合いをしてきたと気づかせてくれます。両国はともに漢字文化圏で、文化、制度においてもかつては同じ側面を持っていました。しかし現在の中日関係は楽観を許さず、両国は第二次世界戦争中の歴史に対する認識に今なお相違が存在しており、また中日両国は現在の国際情勢に対しても異なる選択をしています。両国関係の変化は、双方の民衆の認知にも深く影響します。知るところでは、現在の日本のメディアは中国関連の報道に「選択性」があり、原因の分析に偏りなどの問題が存在するため、日本の民衆の中国に対する認識にも偏りが生じています。この問題について、中日両国のメディアは協力を強化して、ずれをなくし、両国の人々がよりよく相手方を理解し、認識して、東アジアの平和のために良好な雰囲気を作るべきです。

2024 年 03 月 04 日

★「笹川杯全国大学日本知識大会 2023」（17 名）

連峰は晴れているか―訪日感想

天津外国語大学
日本語学院 日本文学　修士２年
楊博宇

（原文日本語）

広い海を抜けると、日本であった。

羽田から池袋への道は、わずか３０分かかったが、僕の五年半ぶりの来日であった。あの時の大学新入生のような未熟さと比べ、今回は笹川杯日本知識大会の優勝者として、この東洋の土に踏み込んだ。トラベル気分もいささかあったが、やはり心境が変わった。

どういう心境かというと、連峰は晴れているか。

ホテルの付近は雑司ヶ谷という所であり、所というか、墓場である。曇天の道をぶらりと歩き回っていて、海洋性の気候は寒さを助けた。そこで夏目漱石の墓を発見した。一代の文豪は静かに眠って、何も語らなかった。僕は墓の前に佇んで、ただ墓碑を注視していた。
やっぱりか、漱石と話すことは、ハードルが高い。

少なくとも、僕はできなかった。

二日目と三日目のフィールドワークやディスカッションはいい経験になるかもしれないが、僕は知っている、僕が考えたことは年齢制限によるものだ。二十代の時の発想を四十代になって顧みると、自分の幼さがかわいそうに思うかな。

たぶん絵空事だよ。自分の思いのまま物事を進めるなら、ひどい目に遭うに決まっている。所詮、大学生というか修士というか、皆は真の社会に入ることはないからさ。というわけで、僕たちより何十年もこの世界の真の一員になった大人たちは僕たちの発想が「意味あり」「素晴らしい」「この考えを保ってほしい」と評するだろう。

たぶん昔、彼らもそういう発想もあり、自分の考えを活用してこのどんどん砕け散る世界を変えようとするかもしれない。結局、自分一人じゃダメ、自分一人は時代そのものを抗うことができない。僕たちを見て、昔の自分が見えるのか、僕はわからない。

ドラゴンを退治した勇者は最終はドラゴンとなるってことかな。

東京の後は長いバス旅である。富士山の下でこの標高３７７６メートルの大和随一の山を望み、確かに素晴らしかった。だが戦国マニアックの僕にとっては、一番期待しているのは松本城であった。天守を昇り、松本市のすべてが見えるようになり、自分もまるで城主みたいな感じがした。真の城主、石川数正の時代はもはや４００何年前のことじゃ。その兜、その家紋を見て、やはりこんな問題が出てくる：

なぜ家康を捨てて秀吉に出奔したか？

次の旅は宇都宮。若山農場で竹林を満喫した。抹茶を竹林の中に飲む体験はなかなか珍しく思い、竹を用いて茶碗をも戴いて、いとをかし。竹林中にモグラが掘る穴が何百個あり、頑丈な動物だ。

宇都宮で一泊、次は笠間市である。僕は地理知識が自慢だが、笠間市は初耳で、そして日本の民家さんにホームステイも初体験である。主人の石川さんは昔、コスタリカという中央

アメリカの国に留学したことがあり、加えて奥さんはロシア人で、インターナショナルについてはかなり深い見解がある。石川さんは僕たちにナチュラル温泉にも連れていって、しっかりと疲労感をなくした。彼の自宅に帰る途中で、石川さん自分なりの「インターナショナル観」を僕たちに語った。今は大意しか覚えていないが、できる限りここで書いてみよう：

「インターナショナルってことは、受け身じゃダメ、自分からなのだ。例えばこの笠間市は、夜になると、真っ黒になっちまったんだ、でしょう？君たちみたいな若者はそういう町に来るわけないじゃないか。やっぱり自分からなんか変えるさ。」

もしかして僕たちが欠けたものは、石川さんの一言かな。

スケジュール満々の一週間の後は、僕たち訪日団のメンバーは帰国便に搭乗した。ラッキーと思うことは、帰国当日、連続の曇天と雨は止んだ。順調に飛び立ち、舷窓からまた富士山が見えた。すごく綺麗であった。ちょうどこの時、二日目の基調講演で、山下智博さんの一言が思い付いた。

「中日友好なんてどうでもいいや。重要なのは友好ではなく、好友と書いて良い友と読む、そうではないでしょうか。」

ああ、石川さんが表したい内核とほぼ同じか。確かに、此度の訪日活動は、一番貴いものは何かを聞いてみると、たくさんの友達が作れたと、僕はそういう風に答える。

いいじゃないですか？

僕は再び舷窓外を眺望し、本州島を横たわる山脈がきっかりと見えた。富士山は何も言わず、そのまま東洋の大地に立つ。

連峰は、晴れている。

交流と絆

天津外国語大学
日本語学院 日本語学部　4 年
馮焱鈺

（原文日本語）

今年の 2 月 17 日、私は北京から東京までの飛行機に乗った。8 日後の 24 日、東京から北京に戻ってきた。8 日間の訪日の旅の中で、私は見たことのない景色をたくさん見て、新しい友達がたくさんできて、人との交流に対してもっと深い認識があった。

今回の旅でとても印象深いのは、日本人の友人や中国人の友人と一緒に東京を歩いて、協力してチームワークをした経験だった。

私は普段人と話すのがちょっと苦手だし、日本語も特に上手ではない。しかし、同じグループの中国人学生も日本人学生も、自分の経験や趣味を私と分かち合い、私の話に真剣に耳を傾けてくれて、同じグループの日本語が上手な学生も私の分からないところを翻訳してくれた。私たちはプレゼントも交換した。

そして、私たちのグループの中には日本語が分からない中国人学生がいた。彼女は言葉が通じないからといってみんなとの交流を減らすことはなく、むしろもっと積極的な姿勢を見せてくれた。みんなで東京を散歩していたとき、彼女は分からないことがあればよく私と他の日本語が分かる学生に聞いて、私たちは彼女の話を日本語に翻訳し、日本人学生の話を中国語に翻訳して、お互いの交流をますます深くなってきた。

中国人学生と日本人学生の間には言語や文化の違いがあるが、中日両国の青年たちは自分の活力、情熱と相互理解の姿勢でこの壁を破った。私も日本語を勉強してよかったと何度も思った。日本語を勉強すると、日本人の友達と会話をすることが出来るだけでなく、お互いのコミュニケーションの架け橋となり、人を助けることができる。また、人と話すときは勇気を出した方がいいと思う。そうしないと、自分の考えを相手に伝えることができない。お互いの考えを交流し続けると、お互いの理解を深め、相手と友情と絆を築くことができると信じている。

訪日の感想

天津外国語大学
日本語学院 日本語学部　4 年
董剣菲

（原文中国語）

春節を終えた後、笹川杯訪日団の一員として今回の日本訪問に参加できることとなり、感動を胸にとても充実した素敵な 8 日間を過ごし、たくさんの収穫がありました。多彩なイベントの中で最も印象深いのは、22 日の笠間市での民泊体験です。

22 日に笠間市を訪れ、同地で日本の家庭生活を身をもって体験する貴重な機会が得られました。滞在した佐藤先生のお宅では、真心のこもったすき焼きをごちそうになりました。夕食の後、佐藤先生が神道の祝詞を唱えてくれました。抑揚のあるおなじみの祝詞の中に、日本の普通の人々の神に対する敬虔な信仰を深く感じ、この民族文化に対する心からの愛着と外国人に対する素朴で友好的な心も感じられました。日本民俗文化の講義でも宗教に関する知識は学びますが、間近で活きた異文化を体験するのは初めてでした。教科書にある知識が本当に目の前で広がったときは、心が震え感動しました。

今回の日本の旅は、視野が広がっただけでなく、新境地の文化体験でした。異国の地の風土と人情を味わって、また異国の友人と深い情を結ぶこともできました。青年は民族の未来です。中華民族の新しい時代の青年である私たちは、祖国の日進月歩で新しくなる発展をひしひしと感じ、肩にかかる不可避な重任を鮮明に感じています。今こうして安穏と会場で他国の友人と 10 年後の未来を心おきなく話せるのも、民家に泊まって生活を体験し、和気あいあいと夕食を共にできるのも、東京の街を漫歩して、異国文化の息づかいを感じられるのも……すべて先人が平和と友好を求め、たゆまず努力した結果です。その努力は、各地で風雲

の巻き起こる世界情勢にあってもこのように安寧で幸せな生活を提供して、より多くのチャンスと可能性を拓き、より広い未来で輝きを放ち、人生の価値を実現する機会をくれます。だからこそ、感激を胸に、この心血を伝承して発揚し続ける責任があるのです。今や国際友好の重任は私たちにかかっています。新しい時代の青年の責任感と使命感を持って向き合うべきです。山川異域、風月同天。真心で平和と友愛を伝達することが、今回の日本訪問で得られた最大の収穫です。

訪日の感想

浙江大学
外国語学院 日本語と日本文学　4年
董潤高遠

（原文中国語）

今回の日本訪問の旅で印象深かったのは、一般家庭での宿泊体験です。

そこでは本当に日本文化の深みと日常生活の精致なきめ細かさを感じられました。ホストファミリーは温かく接してくれて、日常生活のあれこれを見せてくれました。

ご主人の案内で、お住まいとお庭を見学しました。大きくはない家なのですが、ちょっとしたスペースが十分に利用され、実用的で美しいレイアウトでした。お庭はさまざまな野菜や花がいっぱいで、ご主人は自分で栽培したものを食べるのが好きなのだと説明してくれました。新鮮さが確保できて園芸の楽しみもあるからだそうです。

その後、近くのスーパーで一緒に買い物をしました。奥さんが新鮮な食材の選び方と、日本の飲食文化に関する豆知識を教えてくれました。スーパーで驚いたのは、日本は高度に現代化した国なのに、彼らの生活様式にはたくさんの伝統的要素が残っていることです。

夜には奥さんが美味しい日本料理を用意してくれました。食事中、日本のテーブルマナーの一部について奥さんから詳しく説明があり、その後ストーブを囲んでおしゃべりしました。中日の文化の違いなどについて話し、中日両国民の間には決して特に大きな隔たりがあるわけではないのだと感じました。

この一泊の体験で、日本人の生活様式と文化の伝統を知ることができたほか、彼らが客好きで、入念にとても細かい配慮をするのだと感じることもできました。今回の日本訪問の旅で日本という国をより深く知ることができ、また異なる文化や生活様式をより大切にしようと思えるようになりました。

訪日感想

浙江大学
外国語学院 日本語と日本文学　修士１年
高一笑

（原文中国語）

このたび日本科学協会のご招待を受け日本を訪問し、日本文化の独特な魅力を感じ取ることができました。中日友好のために貢献できればと考えております。この旅で特に忘れられないのは、松本城の見学、宇都宮での餃子づくり、画家のお宅でのイラスト体験などです。

初めに、長野県にある松本城を見学しました。この歴史ある城には日本の悠久の歴史と建築の風格が現れていました。城楼に上がって、周りの景色に遠く眺めると、まるで過去に戻ったかのようでした。城内を漫歩すると、精巧で美しい建物と巧みで完璧な技術に揺り動かされました。ガイドさんの説明で、日本の歴史と文化をより深く知ることができました。

明治神宮の長い参道から啓発を受け、私たちのチームはARサイバー神社を作ろうと思い立ちました。この道に歴史と現代の融合を感じて、昔の神社と現代技術をいかに結合させ、斬新な文化体験を編み出そうかと考えました。そこで拡張現実の技術を利用して、既存の神社をベースに架空の要素を加え、観光客が現実世界でサイバーパンク風の体験ができるよう計画。交流会でこの案を発表すると、多くの人から賛同や支持を頂けました。こうした方式を通じてもっと多くの若い人を日本の伝統文化を引きつけ、中日の文化交流の高度な発展を促進できると信じています。

宇都宮では、餃子づくりの楽しさを体験しました。伝統的な日本のレストランで餃子の包み方を学び、自分でも作り方を試してみました。技術こそ未熟なものの、現地の人と餃子のおいしさを共有できて、とても楽しかったです。この体験では料理の腕が上がっただけでなく、日本の食文化に対する親近感が増しました。

最後に、有名な画家のお宅でイラスト制作を体験する機会に恵まれました。先生の作品は独特なスタイルで、表現力に富んでおり、深い啓発を与えてくれます。先生の指導のもと、水彩絵の具とデッサンを使って自分の作品を創作してみました。拙作はプロの画家レベルにははるか及ばないものですが、この体験で芸術への思い入れが強まり、イラストに対する興味がかき立てられました。

今回の訪問を通じて、中日の両国民の間の情誼と文化交流の重要性が身にしみました。こうした体験を中国に持ち帰って、引き続き中日友好交流のために自分ができる努力をして、両国民の間の情誼と協力を促進できればと思っています。

まとめると、今回の日本の旅では多くのものが得られました。松本城の見学、宇都宮での餃子づくり、画家のお宅でのイラスト体験を通じて、日本の歴史、文化、芸術への理解を深めることができました。今回の貴重な体験はずっと大切にします。こうした体験をもっと多くの人に伝え、中日の友好な交流の持続的発展を促進できればと思っています。

訪日感想文

南開大学
外国語学院 日本語と日本文学　4年
金戌擧

（原文日本語）

日本を訪れ、東京の魅力を学生たちと共に探索し、未来への想像について相談する貴重な体験をしました。この旅行は、私にとって一生忘れられない思い出となりました。

まず、日本の文化に触れることができたことは非常に感動的でした。日本の伝統的な建築物や神社、お寺を訪れることで、日本の歴史や精神に触れることができました。また、日本人の礼儀正しさや思いやりに触れることができ、その姿勢に深い感銘を受けました。どの場面でも、人々の心配りと誠実さが感じられ、自分自身もその姿勢から学ぶことができました。

さらに、日本の食文化も魅力的でした。地元の料理を試すことで、日本の食材の新鮮さや繊細な味わいを堪能しました。特に寿司や刺身、ラーメンなどの日本料理は、その独特な味わいと美しさに感動しました。食事を通じて、日本人の食に対する情熱や文化の重要性を理解することができました。

さらに、東京の近代的な一面も体験することができました。高層ビルや繁華街、電車の混雑など、東京の都会の喧騒が新鮮で刺激的でした。一方で、古き良き日本の風情と現代のアートやテクノロジーが融合した場所も多く、その対比が興味深いものでした。

また、学生たちとの交流も非常に充実したものでした。異文化間の意見交換や議論を通じて、世界の多様性や異なる視点について考えることができました。日本人の学生たちとの友情や絆も深まり、これからも国境を超えた友情を大切にしたいと思います。

この旅行を通じて、日本の素晴らしさや魅力をより深く理解することができました。日本の伝統と現代性、文化と技術の融合、そして人々の心温まるおもてなしに触れることができ、心に深い印象を残しました。将来、再び日本を訪れて、さらに多くのことを学びたいと思います。

今回にも、色々日本文化に関するものを体験して観察することができました。日本人の生活の仕方は私たちのとすごく異なっているとは驚きました。隣国である中国と日本の間には、まだまだ色々なことについて知り合う必要があるのではないかと考えております。

私、10 月にはまた日本で研究生を進学して参ります。その時にも、今回やらなかったことややれなかったことをちゃんとやりたいと思っております。日本と中国の架け橋になりたいのです。

訪日感想

南開大学
外国語学院 日本語と日本文学　修士２年
樊行雯

（原文日本語）

今回の訪日に参加でき、大変光栄に思います。このような機会を提供してくださった笹川平和財団笹川日中友好基金と日本科学協会に感謝の意を申し上げます。全国から集まった多くの優秀な先生方や学生たちに出会うことができて、幸運なことだと思っています。私は先生や生徒たちから多くのことを勉強になりました。この８日間は人生においてとても大切で忘れられない体験となりました。

最初の 18 日と 19 日の二日間、東京で開催された第４回「日中未来創発ワークショップ」に参加しました。今回のワークショップは「私達は実現したい『未来の生活』」をテーマとして、山下智博さん、劉セイラさん、于智為さんがゲストとして基調講演を行いました。彼らは 10 年前の自分を回想し、自らの経験を語りました。3 人の講演者は、それぞれの分野で優秀な実績があり、そして洞察力のある方々でした。彼らの意見を聞くことができ、多くのインスピレーションと今後の人生設計を明確にすることができました。

あとはチーム別のディスカッションで、私たちのチームは、ボランティア１人、日本人学生２人、中国人学生４人のあわせて７人でした。どの学生も日本と中国の優秀な学校の出身で、ディスカッションの過程では深い考え方をもち、フィールドワークで感じたことを振り返えました。また、日本人学生とのディスカッションによって、考え方のぶつかり合いを感じ、お互いの理解も深めました。

フィールドワークでは、私たちのチームは浅草寺、秋葉原、新宿に行きました。このような路線によって私たちは江戸から現代までの日本社会の変化を実際に体験することができました。最初のアイスブレイクから２日目の活発なディスカッションに至るまで、中国の学生たち

は日本に対する深い関心をもち、日本社会のさまざまな側面に対するユニークな観察眼を発揮しました。また、フィールドワークから得た知見を交換し、議論することで、日本を観察し、また学ぶための視点をより多く得ることができました。

あとの四日間は日本の各地に観光しました。美術館、竹林、稲荷神社など、この旅で訪れた多くの場所に感動し、日本の自然の風景と古典的な文化遺産を見ることができました。一番印象に残っているのは、笠間市で地元の日本人の家に泊まったことです。今回は写真家の江田さんのお宅にお邪魔しました。夕食はとても豪華で、食器はすべて地元で有名な笠間焼で、料理もすべて日本の家庭料理でしたが、美味しかったです。食後は、江田さんは子供たちや孫たちのこと、写真家としての仕事について話しました。国も年齢も関係なく、親切で暖かい家でした。日本に旅行しても、地元の日本人の家庭にホームステイする経験はなかなかできません。このような機会をいただき、本当にありがとうございました。

訪日の感想

南開大学
日本語学院 日本語学部　3 年
賈昕怡

（原文中国語）

笹川杯全国大学生日本知識大会の受賞者として、日本での 8 日間の観光と学習に招待され、とても光栄です。短くも充実した時間の中で、中日未来創発シンポジウムに参加し、日本の若者と共に、中日の未来の見通しを探りました。彼らの側では、濃厚な友情と協力の雰囲気を感じました。

最も印象深かったのは東京の街を散策したことです。繁華で活気に満ちた都市にとても引

きつけられました。高いビルが林立している都市の空、人の往来が頻繁な大通り、いずれにも東京の独特な魅力が現れていました。そこでは日本国民の未来に対する限りない憧れと奮闘する精神が感じられ、中日の友好交流の重要性も身にしみました。

幸運なことに、東京の他にも日本の都市を遊覧しました。松本、笠間などです。そうした美しい地方で、各都市の静かさと自然の美を鑑賞しました。どこの景色にも日本の独特な文化的基盤と人文の魅力を感じ、この国への理解をさらに深めることができました。

この旅行では視野が広がっただけでなく、中日の友好交流の重要性がいっそうかたく信じられました。将来は中日両国の青年が手を取り合って進み、いっそうすばらしい明日を共に作るだろうと深く信じています。中日の友情がとこしえに続きますように。

訪日の感想　中日青年交流の美を訪ねて

中国人民大学
外国語学院 日本語と日本文学　修士１年
陳心語

（原文中国語）

日本科学協会のご招待にあずかり、このたびの８日間の訪日イベントに参加しました。中学生の頃に日本を旅行したことはありますが、今回のイベントでは、普通の旅行では得られようのない貴重な体験――日本の友人たちとの交流ができました。

2 月 18 日から 2 日間の「中日未来創発シンポジウム」があり、日本の大学生とチームを組んで、日本の日常生活を体験しました。都内を散歩する過程で、言葉の壁によりチーム内がしらけてしまうことはありませんでした。私たち中国人は漫画の広告看板、宣伝車、地下鉄の柔らかい椅子など新鮮な発見を前に、喜び勇んで日本の学生に質問すると、彼らは根気よく答えてくれて、日常の小さなことにある中日の違いに驚嘆しつつ、反対に中国の状況に興味を持ったようでした。こうした双方の発見の旅を終えた後、再び会場に集まってチーム討論し、東京の現地視察での感想と未来の生活についての想像を語り合いました。お互いの交流を通じて、カルチャーギャップと共通点を記録し、先端技術を利用して未来の生活へのあこがれを描き、作品を共同制作して共に展示しました。こうした協力し分かち合う過程で結びつきが強まりました。

今回の貴重な交流イベントを通じて、中日の文化交流に決して絶対的な隔たりは存在しないと実感しました。違うところはたくさんありますが、環境、情報などの問題に直面して、同様な悩みと期待を持っているのです。お互いの文化に対する尊重と興味を保ち、理解と共存を諦めなければ、共に描いたすばらしい未来を築けるかもしれません。

訪日感想

中国人民大学
日本語学院 日本語学部　3 年
滕俊淞

（原文中国語）

人との出会い。さまざまな人と実際に出会って、話し合って、それから知り合いに。私たちは各地から出発し、それぞれの理由を背景に、今回の特別な旅に参加しました。性格、趣味、習慣の異なる私たちがこのごく短い 8 日の中で交流し、討論し、笑いました。夜に漫歩した東京、松本、宇都宮、そして笠間の大通りや路地で、みんなでよくしゃべり、笑い声が夜空に広がりました。そのことが今回の旅で一番のサプライズだったかもしれません。

当初の怖さが目新しさに置き換わると、人と人との距離がより近づきます。
集まるはずがなかった多くの人々との出会い。予測のできなかったエピソードとの出会い。知り合ったばかりの人と目的もなく街をぶらついたこと。グループのメンバーと一緒に考えたこと。それぞれの人生、物語を、聞いて、話して、体験しました。過去の話に感慨を覚えては、そのとき起きていることに驚きました。

大学に入りたてでまったく日本語のできないルームメイト。中国語は第二外国語にする予定だという日本人メンバーは、浅草寺を一緒に訪ね、夕飯のときみんなのためにもんじゃ焼きを作ってくれました。1970 年代にシベリアからモスクワへ大陸を横断し、ベルリンの壁をその目で見たというホストファミリーのおばさん。国籍も年齢も問わず、言葉の壁さえ越えて、集まっていました。

私たちの間に共通点があるのかもしれません。共通点があるから集まっておしゃべりできるのですが、しゃべっていると、誰もが生き生きとしていて、それぞれに違い、それぞれの良さを持っているとつねづね実感できました。

こうした人との交流ができ、言葉のなかから過去の面影を見つけられたことが、今回の旅で最も幸運だったことかもしれません。

同行した顧先生の言うように、今回の旅の意味はどこに行ったか、どの観光地を訪れたかではなく、人との出会いにあります。本来なら集まる理由も可能性もない人たちと出会い、私たちが共有する未来について考え、対話し、笑い、理解するところから互いに最初の一歩を踏み出すこと。

一人か二人の新しい友人と知り合うこと。うろたえながら恐る恐る踏み出した一歩も、その場で躊躇するよりはずっと強い一歩です。そのことが今回の旅で一番の収穫だったかもしれません。

訪日感想文

中国人民大学
日本語学院 日本語学部　3 年
蓝雅琦

（原文中国語）

日本への旅では収穫がたくさんありました。おおむね以下の 3 つに分けられます。

初めに、最も深く印象に残ったのは、日本の農村には財産があるということです。民家に泊まった日、車で迎えに来てくれたおじさんは、「平凡な家なので嫌わないでね」と謙遜していましたが、実際にお邪魔したのは 50 年代に建てられた一戸建てで、財産あってこそ善意があるのかと察しました。日本の農村は決して後れている地区の代名詞ではなく、コンクリートジャングルに暮らす都会人が憧れる「リゾート」なのです。日本に、特に農民にどうして財産があるのか、都市部と農村部との貧富の格差を解消するにはと考えるなら、恐らく二三百字では足りません。他山の石をもって玉をみがくべし。日本の農村の建設の教訓は、中国の田舎の振興のために参考となる価値は多いと思います。

次に、私は新宿に対しても夢中になりました。新宿を歩くと、まるで資本主義と消費主義という夢の中に落ちたかのようでした。生まれつきの飲食欲、虚栄心、もろもろの情欲などすべてが、この街のネオンとビルの中で成長して広がっています。乱れ咲く花に目がくらみ、この場所に身を置くと、人に抵抗力はなく、視線はいろいろな広告に奪われ、耳は流行の音楽に占領されて、両脚さえ信号機に変換されて足が地に着く前に向きを変えてしまう―そこで重要なのは思考ではなく感覚です。生まれつきの逃れられない欲望を、社会に早くから仕組まれたさまざまな落とし穴を、冷静に嵌まる無間の輪廻を本当に感じ取るのです。

最後に、日本の風景と美食も深く印象に残っています。幸運にもいくつか日本の名所旧跡を遊覧して、ご当地グルメを味わい、日本の独特な魅力と飲食文化を感じることができました。まとめると、今回の学習旅行では、日本語と日本の文化がいっそう好きになっただけでなく、視野も広がり、学習の道を進む自信が強まりました。

訪日の感想

河南師範大学
日本語学院 日本語学部　4 年
黄旭鴻

（原文中国語）

8 日間の旅行を通じてとても多くの収穫がありました。まず最大の収穫は、たくさんの良い友達ができたことです。中国の学生、日本の学生、先生、ボランティアを含みます。皆さんとても友好的で親切で、仲間はずれや隔たりがまったくありませんでした。長年の友人同士のように助け合いができていました。最も印象深いのは、帰りの飛行機に乗る前、託送の

手続きが国内線と違うせいで、うまく手続きができなかったときです。幸い知り合った北京外大の先輩と武漢大学の同期生が親切に手伝ってくれたので、きちんと託送の手続きをすることができました。

訪日の間、一緒に過ごしたルームメイトは本当にとてもすばらしい人たちでした。みんなはお互いに思いやり、関心を持ち、助け合っていて、共通の話題もたくさんありました。毎日をとても楽しく過ごすことができました。民泊に滞在したときは、ルームメイトたちと掃除や料理をして、茶道の体験もしました。とても良かったと思います。民泊ホストの女性ともいろいろ話が弾み、新鮮な発見がたくさんありました。例えば彼女は東京外国語大学を卒業していて、前世紀にはソ連と東ドイツを訪れ、ベルリンの壁に行ったこともあるのだそうです。

日本の景色も深く印象に残っています。一番は、都庁から眺めた東京の景色です。東京の賑わいが見えました。天気にも恵まれ、訪問翌日の東京は晴れました。新宿御苑を遊覧すると、青々と茂る木と満開の梅が見られました。日本のボランティア２人が根気よく解説をしてくれました。一緒に夕食を楽しみました。さらに不思議だったのは、富士山のある山梨県は曇りとの予報だったのに、富士山に着いたときには晴れていたことです。同行した学生みんなとかっこいい写真を撮ることができ、本当にお天道様が味方してくれたのだと思います。

講演会では、劉婧犖さんと山下智博さんの講演に深く感銘を受けました。劉さんが日本で声優を目指した体験にはとても感動しました。日本語を母語としていてさえ声優になるのは大変なのに、まして外国人です。しかし彼女は高校生のとき決意を固め、日本で声優になると信じてきました。結果的に彼女は夢を実現し、さらに多くの可能性を見つけました。山下さんの講演はとても地に足が着いた感じがしました。中日の友好は彼にとってあまりに空虚で、実際の友好はスローガンではなく、毎回の人と人との交流だろうという話でした。まさに交流があってこそ、理解でき、真の友好があり得るのです。シンポジウムでは、創意に富んだ絵が多くの先生に褒められました。

まとめると、すばらしい体験でした。同行の先生方、学生各位、ボランティア各位、そしてスタッフ各位、皆さんに感謝しています。今後も努力を続け、素晴らしい未来のために奮闘します！

日本との一期一会のご縁

浙江越秀外国語学院
日本語学部　４年
管億嘉

（原文日本語）

人の記憶には、忘れられないものがたくさんある。また、初めてすることがもっとも忘れ

がたい。私にとって、最も忘れられないのは、今回の日本への旅である。そして、「一期一会」という言葉をしみじみ心得た。初めて「一期一会」という言葉を知ったのは漫画「舞妓さんちのまかないさん」からだ。百子さんが「日々の出会いをすべて、さよならではなく、始めましてという気持ちで取り組みたいと思います」と話した。その時まだ雲を掴むような気分だったが、それからずっとその中に込められた深い意味を考えていた。

2024 年は私にとって、忘れられない年だったが、それも人生の「一期一会」のチャンスに巡り合えた年だった。親は遠いところへお金を稼ぐため、あまり家へ帰ってこないから、生まれてからお婆さんと二人暮らしだった。お婆さんも畑の仕事で忙しいから、家では遊んでくれる相手がないである。ネットの普及によって、小学校三年生の時日本のアニメと出会った。アニメはまるでお姉さんみないで、人生のいろいろなことを教えてくれた。

その後、高考でいい点数取れなかったが、日本をもっと知るために、日本語の専攻を選んで、今の大学に入学した。勉強しているうちに、日本語学習の大変さと面白さを共に感じられるようになった。いつか日本へ行きたいという目標をたてた。しかし、うちはお金の余裕がないで、親は家族のためにもう精一杯だから、まず自分の能力をちゃんと向上して、自分で留学する金を稼いで、いつか日本へ院生として留学したい。そこで、昨年、笹川杯の知識大会に出て、予想以上決勝戦へ突入し、2024 年 2 月に日本に行けることになった。

日本へ行く、しかも日本でただで遊べることは夢にも思わなかった。それはまさに、私の人生における日本との「一期一会」のご縁である。一度しかない日本との出会いをつかみ、日々の努力を積み重ねて、夢に向かって走っていきたいと考えられる。広い羽田空港、狐の神様が居る稲荷神社、青い空と富士山、甘いモンブラン、暖かい温泉など夢にも思わなかった景色、味、触感が体に染み込んだ。特に 7 日目の民宿体験、酒井ご家族がいろいろな気づかいは感謝の極まりだ。食事しながら、色々なお話できて、暖かい感じがした。うちは両親が仕事で忙しいから、そんな長い対話はまったくなっかたので、少しこのような生活に羨ましい。食事の後、奥さんは中国の「再見」はいい言葉だねえと呟いた。その一瞬、「再見」は「再び会おう」という意味で、日本の「一期一会」と異曲同工の意を表していると気づいた。

私は将来家族を辛い仕事しなくていいように、食事の後も長く対話できるように、楽な生活ができるように、未来のために頑張りたい。最初は五十音図も読めなかったが、今では日本へ辿り着き、日本人に中国のことを教えることもできた。これからも通訳学の勉強をずっと取り組んで、いつか立派な通訳になって、中日友好のために自分の力を尽くしたいと思っている。名残は尽きませんが、日本「再見」！

訪日感想

北京外国語大学
日本語学院、日本学研究センター　修士 2 年
周宇豪

（原文日本語）

日本科学協会及び笹川平和財団にお招きいただき、8 日間の訪日を無事に終えることができた。日本に来るのは三回目であるが、やはり今回の訪日が前の二回に比べて、より深く日本社会を観察するチャンスを与えてくれたと思う。

最初の 2 日間、「日中未来創発ワークショップ」に参加し、「未来の生活」を想像するため、東京の街中でフィールドワークに行った。グループの中の日本人学生さんと一緒に、最近オープンしたばかりの麻布台ヒルズに行った。麻布台ヒルズが位置する敷地は元々細分化され、小規模な木造住宅やビルが密集し、建物の老朽化も進むなど、都市インフラからの整備が必要な状況であった。都市再生の一環として、30 年前から建設計画を立て、様々な議論を重ねた上、ようやく 2023 年 11 月 24 日に開業した。超高層ビルより私の目を惹きつけたのはビルに囲まれた緑豊かな中央広場である。今はまだ寒いので、芝生広場が落葉色となっているが、暖かくなるとここは緑の世界になることは想像しにくい。人々に季節の移り変わりを感じてもらうために、中央広場の周辺には落葉樹がたくさん植えられている。中央広場に入ると、まるで繁華な東京の都心部から物静かな森林に潜ったという感じがする。せせらぎを聴きながら、近くにある青空を背景にした赤白の東京タワーを眺めている自分は心身ともにリラックスできたと感じる。

麻布台ヒルズの理念は圧倒的な緑に囲まれ自然と調和した環境を作り上げるということである。大気汚染や環境問題といった深刻な都市化問題に直面した中国も自然と調和的に共生できる都市の発展の道を模索している。日中両国は都市再生という分野における協力の空間がまだ広いと思う。

東京のような大都市のほか、我々は松本や宇都宮、さらに笠間といった一般の外国人観光客があまり行かないところに訪れた。松本市美術館で草間彌生の作品を鑑賞したり、宇都宮で日本風の餃子作りを体験したり、笠間でホストファミリーと一緒に温泉に行ったりして、東京で感じた「モダニティー」と全く異なる日本の「郷土味」を満喫してきた。

最後になるが、今回の交流を通じて、改めて日中交流の大切さをしみじみと感じた。1 日目のワークショップで、講師の山下智博さんが話したように、日中友好はもとより、日中好友つまり、実在する他国の人々と仲良くすることこそ、交流の最大の目的ではないかと強く感じている。

手を携えて進み共に未来を作る―2024 年笹川訪日団での訪日の感想

上海海事大学

日本語学院 日本語学部　4 年

朱泳康

（原文中国語）

2024 年 2 月、笹川訪日団に従って日本を訪れました。8 日間の旅路では、繁華な新宿の街

を歩き、そびえ立つ富士山を見て、歴史ある松本城にも行きました。また自分で餃子を作り、日本の茶道を感じ取って、人文と景色の中で日本の文化とふれあいました。この旅ではまた、中日の民衆の親しみと現代の中日の文化交流の重要性も深く感じました。

感銘がすこぶる深いのは次の二つです。一つは中日の学生の交流シンポジウム。東京の街頭を日本の学生と漫歩したことで、この都市の文化、この国の文化を深く感じ取ることができました。日本の学生の絶え間なく流れる言葉を聞いていると、この国とこの国の文化に対する新たな認識が得られました。その後のシンポジウムでは、中日の学生の間の思想の衝突から、文化交流の重要性とその中に現れる未来の可能性を感じました。目下の国際環境では、国家間の交流には多くの不便が存在するため、私たちのような若者が責任を担う必要が増しています。もう一つは郊外での民泊。東京が見せてくれた極致の輝きと比べて、田舎ではこの国の風土と人情が、より平凡な市井の生活が感じられました。ホストの方は茶道のデモを見せてくれたとき、わざわざ特別な器具を用意してくれていました。彼女いわく、中日の友好がとこしえに続き、みんなはもっと交流できるよう願って「橋」の要素を帯びた品物を用意したとのことです。私たちのような若者が中日の未来の橋になれますように、との願いを聞いて、さらに感動が深まりました。

日本訪問から帰って、時代に与えられた責任を深く感じています。このような交流の機会は非常に貴重です。私も将来チャンスをつかんで、中日の未来の橋を架けようと思います。

感想文

武漢大学
日本語学院 日本語学部　4年
辛　宸

（原文日本語）

中国にある「十年でも本を読むのは、千里の旅立ちに及ばない」という古いことわざの如き、今回の訪日活動は私の人生初の日本への旅行経験として、いろいろ勉強になることや一生忘れられない思い出をもたらしてくれた。このわずかの８日間を通じて、かつては教科書にしか見えない知識を自分の目と鼻、口で実体験できて本当に良かったと思う。日本の社会や文化への理解と興味がより一層深くなるだけでなく、日本の大学生たちまたは民泊の家長さんとの話し合いで、日本語母語話者と日本語で話す能力が一段と上がるとともに、過去心にある日本への先入観や間違っているステレオタイプがすべて払いのけられて、日本は実はどういう国家なのか、日本人の方々いったいはどういうイメージを持っているかという質問に自分の答えを見つけられるようになってきた。

もし今回の訪日旅行で何が一番楽しかったかと聞かれると、その答えは、中国人と日本人の数多くの友達ができて、彼らと一緒に思う存分に交流したり、写真を取ったり、また面白かった時間を過ごしたことに違いない。私は事前に車内レクリエーションを企画する組に申

し込んで、みんな一緒で知恵を絞ってバスでの移動時間を潰すいくつかの活動を打ち明けた。中国各地からの大学生の方々とともに取り組んでいるうちに、だんだん助け合えて話し合える友達となった。また、日本人の大学生の方と様々な分野について話すこともできて、日本の若者文化や若者の言葉使いを徐々に心得た。そればかりでなく、両国の異同をいろいろ話すことを通して、お互いの理解を深めることもできて、まさに中日両国友好のかけ橋にならなければならないというような責任感を感じた。

本当に心から嬉しく存じるとともに、今回の開催にご尽力いただく中国人民大学や日本科学協会、笹川平和財団の方々に心底から感謝の意を表したい。

笹川杯訪日イベントの感想

聊城大学
日本語学院 日本語学部　4 年
王　欣

（原文中国語）

2024 年 2 月 17 日、訪日団に従って日本行きの飛行機に乗り込みました。この旅行が印象深くなかったとは言えません。かなり深遠な影響も受けました。

まず、このイベントに参加できる機会を得たことで、前の年の運を使い果たしていると思います。笹川杯全国大学日本知識大会に参加したときは、見聞を広めて他大学の学生と学習交流を図ろうという気持ちで初戦に臨みました。決勝戦までたどり着き二等賞を獲得できたのは、3 年の努力が報われて、運もついていたのかと思います。私にとっては、この経験そのものがこの上ない幸いなのです。しかし、指導教官の先生から、他の受賞者と日本へ学習旅行に行けると聞いたとき、私は狂喜しました。あの喜びを形容できる言葉はありません。

たった 1 週間の学習旅行で、中国と日本の友達がたくさんでき、さまざまな風土や人情を感じて、さまざまな民族文化を味わい、日本で学びたいという決意がさらに固くなりました。道中は感嘆して銘記すべきことがたくさんありました。たとえば 1 日目と 2 日目のワークショップ、口にした日本のグルメ、東京から北上する間に見えた美しい景色、7 日間を過ごして感じ取った日本の文化などです。最も印象深かったのは、民泊した夜のことです。滞在先に行く前はとても緊張していましたが、ご主人たちが暖かく歓迎してくれているのを見て心配が吹っ飛びました。泊めていただいたのは江田さん宅で、彼女はカメラマンだそうですが、料理がとてもお上手でした。江田さん宅には他の観光客が泊まっていったときの写真もあり、思わず江田さんご夫妻に敬服してしまいました。ご夫妻は民泊のホストというだけでなく、日本の文化と愛を広めていく使者です。

楽しい時間ははかないもので、日本の茶道に言う「一期一会」の精神も学ぶべきなのでしょう。別れる前に感傷に浸るのではなく、毎回の出会いをこれが最後の機会と捉えて相手に接し、相手を大切にするのです。これが、今回の旅で学べたことです。

★「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2022. 2023」（日本語版）（8 名）
2022 年受賞者

訪日の感想

福州大学
外国語学院 日本語学部　4 年
林子晗

（原文中国語）

日本へ行っての交流イベントは幕を下ろしましたが、得られたものは多く、深い体験ができました。今回、この一衣帯水の隣国に対する認識は SNS でも紙の教科書でもなくなりました。その地に足を踏み入れ、もっとリアルな日本を目にしたのです。

2 月 17 日から 24 日、相前後して日本の東京都、山梨県、長野県、栃木県、茨城県を訪問し、日本の繁華な市街、名所旧跡、風情ある竹林、美術館などを見学しました。シンポジウムの中で日本の学生と深い友情を結んだだけでなく、民家に一泊して、現地の郷土文化の雰囲気を身をもって経験しました。国同士の関係いかんに関わらず、相対的に理性的な態度で臨むと、日本民族には私たちが学ぶべき尊い素養があることを発見できたのは確かです。人口の移動量の爆発している東京の街頭でもなお路上を散らかさない「ゴミ処理」の意識が保たれていたこと。特にルールもないのにエスカレーターで左側に立つ「秩序」感が保たれていたこと。一瞬一瞬が二度とないものであると心得てその時の「闊達」な人生の態度を大切にすること。偶然にめぐり会った赤の他人も懇ろにもてなす「素朴」な心。

今回の日本訪問は両岸の民衆をつなぐ橋を架けたようなもので、両国民の心がこれほどまで近づいたことはありません。熱々の鍋を囲んで、言葉の壁に苦労はしてもずっと談笑が続き、その瞬間は国籍、性別、年齢に関係がなく、いつまでも絶えない暖かな気持ちがお互いの心を行き来していました。「相互の理解を渇望し、中日友好に期待する」種が私たちの心の中でそっと芽を出したのが分かります。

民家に一泊したときの伊藤先生ご一家との記念写真

モンブランを味わう体験

真

四川軽工業大学
日本語学院　修士１年
王云樵

（原文日本語）

「真ん中の一本は真（シン）と呼ぶ」―笠間の民家に宿泊した際、オーナーの西さんから教わった生け花の知識であった。それを最初に耳にした折、「芯（シン）」と勘違いしてしまった。根強いあの太い幹はきっと芯が強く、雨風に凌げるだろうと思ったから。なのではっと気付いた時、自分でもびっくりした。あたかも我慢なしに前へ進めないように、いつの間にか、あらゆる物事を辛抱強くとらえようとしていた。

訪日が始まる寸前、私は眠れなかった夜を上海の空港で過ごした。それは別に高揚感や期待などの祟りでなく、むしろ疲れと心配が脳裏にうろうろしていた。しかしそんな張り詰めていた気持ちは日本の土地に足が付いた途端から跡形もなく晴れていた。盛り上がる夕食、話が弾む人々、予想以上に楽しい初日を持って旅は幕が開いた。

二日目の東京でのフィールドワークにおいて、私達のグループは渋谷にて日本の文化を感じ、浅草にて神々へ祈りを捧げ、新宿にて銀河のように輝く町の夜景を目に収めた。そして自分の目で確かめ、足で歩んできた日本という土地で身をもって受けた感銘は銘々の心の奥に嵩張ってきて、詰まりに詰まったその思いを三日目の笹川平和財団でのワークショップに

て皆さんは隠せず打ち明けていた。奇想天外の発想がたくさん取り上げられ今まで一番楽しいワークショップで、皆さんは互いへの理解がより深まり、グループメンバーの協力だけが示されるのでなく、中日の人の結束力、ひいては中日両国の繋がりが仄めかされている。この三日間、日本ならではの景色や文化に心が引かれるが、それ以前に、街を歩く時、周りの人が自然に日本語を喋っていること自体に私は深く感動してしまった。

妙だけど気分のいいその感動を抱え、私達は東京を出て各地を巡りに旅立った。晴れ渡る空の下、河口湖で撮った富士山の写真、ぎりぎりまで頑張って皆が登った松本城、宇都宮での餃子作り体験、若山農場にある美しい竹林.....どれも教科書に乗っていないが心に残る場所であった。

そして笠間市に辿り着いたのは、旅の最後であって、楽しい訪日もまもなく終わりが告げられる。西さんの家で生け花をする中、何日間の感動が心に詰まり、色々な思いが馳せられていた。もちろん旅自体はすでに２００パーセントに素晴らしくて楽しかったが、私が心で一番大切に思うのは、この旅で出会った皆との触れ合いである。

「真ん中のは真、隣のは添え、生け花というのは一つの世界であり、作った人の心の宇宙を反映している。真と添えは向き合わなければならない。友達だから」。小さい頃の私は日本のアニメや音楽、ドラマやバラエティーが好きで、それをきっかけに日本語を勉強し始めた。そしてその途中、また日本の文学や歴史に触れ、日本全般が好きになってしまった。しかし一生懸命に走れば走るほど、かの熱情がスーツケースに取り残されて、衰えてきた。そして月日が経つとともに、自分でさえ最初の感動を忘れてしまい、ただ毎日に我慢しながら生きていたが、この旅の中、はじめてその気持ちに答え、対面してくれる人と出会った。皆違う出身にもかかわらず、日本と繋がりたいという一点に口を利かずとも理解し合うことができる。中国人か日本人かと関係なしに、皆初対面なのにすぐ親友になった。それが本当に暖かくて、自分が一人ではないと思い知らせて、おかけで耐えることの繰り返された無感動な毎日から目を覚まし、初心を取り戻せた。

大人になるにつれて、今まで大切に思っていた様々のことが段々色褪せていき、そのせいで迷うこともあるだろう。にもかかわらず、人との繋がりがある限り、迷子にはなれない。日本語を学んだことが私にとっての真（マコト）であり、その道のりで得たたくさんの感動が添えである。一方、私自身という真（シン）のそばには、皆という添えが立っている。それを知っただけで、私の世界が照らされ、もう何も怖いことなどない。そして私もまた、誰の世界に滑り込めることができるのなら、その世界で添えになって、真と向き合い、真を支えていきたいと思う。

十年後や二十年後、きっと色んなものが消えてなくなり、また色んなものが築き上げられるのだろう。それでいて、この先どんなに世界が移り変わろうと、中国と日本は自分の世界の真と相手の世界の添えとして、互いを理解し合う心でさえいれば、そのネクサスがある限り、未来は今日を超え、今よりも輝くものになれると信じている。

ほんの短い時間での一期一会だったが、かけがえのない思い出として私にとっての一番の宝物となった。これから先どんなことが起きろうと、私はこの縁のことは絶対に忘れない。必ず未来へ連れていく。本当に最高に楽しくて素晴らしい旅であった。

晴れ旅

北京外国語大学
日本学研究センター　修士１年
張佳瑜

（原文日本語）

2024 年 2 月 17 日。春節の期間はまだ過ぎていなく、実家でのんびりしているはずだったこの土曜日は、私の人生における三度目の訪日初日となった。一度目は六年前の旅行で、新鮮な気持ちでいっぱいだった。二度目は五年前の交換留学で、不安を抱えながらも達成感の溢れる一年だった。そしてありがたく日本科学協会、笹川平和財団のお招きをいただいた三度目の訪日。行くたびに違う感動が生まれる。

今回の訪日旅行で日中未来創発ワークショックと民泊体験が一番印象に残った。日中未来創発ワークショックでは、「私達が実現したい『未来の生活』」をテーマに、グループに分かれて都内フィールドワークをしてチーム別でアイディアを発表した。私のいるチームは東京都内を散策するに伴ってみんな仲良くできた。短い 2 日間ではあるが、大切な思い出になった。

また、民泊体験で茨城県笠間市の「モネの家」に泊まることになった。モネさんはとても親切な方で、私たち 5 人を娘のように接してくれた。みんなでサバカレーを夕飯に作り、

カレールウのお土産さえもらった。日本式カレーの作り方をモネさんとボランティアの佐久間さんに教えてもらい、こたつを囲んで家族のようにゲームをするのを思い出すと、つい口元が綻んでしまう。お別れの日の朝、目覚めたら窓から外を眺めると大雪だった。雪が大好きな私はこれほど素敵な雪景色を目の前にして、一瞬息を奪われたような気がした。しかし佐久間さんと話すと、あまり大雪の降らない笠間市で大雪が見られることは、私にとっては幸運だが、丘の上に住む笠間市市民にとっては困ったことだとわかった。そこで私は考えた。私は新疆の出身で、今回の旅でも日本人にいわゆる「新疆問題」について聞かれた。その時は民族迫害などのことは一切ないとわかってもらえるように伝えたかったが、どうも言葉だけでは無力だと感じた。実際当地へ行って自分の目で確かめないと、本当だと信じてもらえないのではないかと思った。大雪の場合も同じく、自分が体験者でないと大変さは気付きにくい。これが国際交流活動の意義だと痛感した。

私たちが実現したい未来へ飛べよう

北京第二外国語学院大学院
日本語学と日本語教育　修士２年
劉力暢

（原文日本語）

「日本語を勉強して、将来は中日友好の架け橋となるために努力しようと思います。」日本

語を専攻する学生であれば、誰でも一度はこんなことを言ったことがあるだろう。授業の時、作文を書く時、スピーチをする時、私はこの言葉を何度も繰り返しているが、後半の言葉をどうやって実現すればいいのか、よくわからない。

このような疑問を抱いて、初めての日本旅行は始まった。

日本語が少し分かるのが原因かもしれないが、日本という国は意外と異国感があまり強くない。アニメや教科書で何度も目にした風景が、現実のものになっていても特に疎外感が感じない。池袋 60 階の展望台から見たきれいな東京の夜景は、思わず上海のことを思い出した；新宿駅の混雑の中を歩いていると、北京の時と同じような交通渋滞を感じる。訪れる私たちにとっては観光地だが、この地で暮らす人々にとってはそれが生活なのである。友だちと本屋に行ったり、カフェに行ったり、公園に行ったりする楽しさは、どこにいても同じだろう。私は次第に物怖じせず、八日間の新しい人生に前向きになれるようになった。

もちろんのこと、日本にもいろいろな違いがある。東京の道を歩いていると、どうしても左側通行が覚えられなく、複雑なゴミの分別にもよく迷っていた。日本の街が想像以上の清潔であることに驚いただけでなく、ウィーチャットペイが広く普及したことも、現金決済しかできないと思っていた私が恥ずかしかった。この八日間にあったすべてのことが、私の心の中のあの夢幻と虚無の日本を、だんだんイメージが豊かで真実になって、私の記憶の中に根を下ろしている。

「中日友好はあまりにも難しいから、できるのは相互理解だけである。」これは山下智博先生の言葉である。交流してこそ、理解できるし、理解してこそ、最後には友達になれる。新宿駅で道に迷った時、見知らぬ日本人の女の子に助けを求めたことがある。道を知らなくても、ちゃんと道を聞いてくれる人を見つけてくれた、とても親切な女の子。11 時までゲームに付き合ってくれたホストファミリーのモネさんは、私たちが楽しかった様子を見て、「いつか日本で嫌なことがあったら、今日のことを考えてくださいね。」とにこやかに言ってくれた。日本で出会ったすべての人は、彼らの行動で中日友好のために払った努力を私に示している。雨の中、横断幕を掲げて私たちを歓迎してくれた日本の皆さんの様子を見て、「中日友好の架け橋になる」というのは決してうわ言ではないことがわかった。まだ未熟な私たちであっても、きっと自分のやり方で力になれると心から信じている。

今、私は北京の寝台に座って、白い恋人を食べ、日本で買った栗茶を笠間焼のカップで飲んでいる。一枚一枚の写真をめくって、この八日間の思い出は私の一生の宝物だと考えられる。

2023 年受賞者

感想

上海交通大学
外国語学院　日本語学部　3 年
馬銀炫

（原文中国語）

「海内知己を存せば天涯も比隣の若し。」これは真木先生のお宅で見た対聯です。長く語り伝えられる中国の詩句は今や海外にも広く伝わって、他国の人と中国の人の深い友情を示す媒体となっています。

真木先生は私が笠間に滞在したときのホストの方です。ご夫婦は 80 代のご高齢ですが、温かく受け入れてくれて、現地の美味しいものをたくさん用意してくれました。他の家庭にお邪魔したグループと違って、博物館を一緒に見学したり手工芸を体験したりはしませんでしたが、収穫は大いにあったと思います。

老夫婦はできる限りの配慮といたわりを尽くし、かつて中国を観光した 15 回の旅について語ってくれました。私たちは温かいコタツを囲んで座り、日本語で話をしました。完全には理解できないことも、意図を伝えきれないこともありましたが、お互いの真心は交流の上の少しの障害を乗り越えることができ、異国の友人に対する真心が小さい日本家屋に満ちていました。

出発間際に真木夫人が 1 枚の絵をプレゼントしてくれました。いわく 3 月 3 日はひな祭りで、娘のいる家では絵を用意して戸口に飾るのだそうです。そのときとても温もりを感じました。ご夫妻は決して外国人や客人のように扱わず、身内の娘のように接してくれたのです。共に過ごしたのはわずか 1 日なのに、家族のような温もりと善意を寄せてくれました。

真木夫人はずっと、「日本語が分かる子たちで本当によかった」と言っていました。その瞬間、日本語を学ぶ意義を感じました。

この 8 日間、訪日団の学生たちと共に関東地区の多くの場所を訪れ、伝統的な日本の美食を食べて、お互いの交流もたくさんしました。充実と満足を感じています。この場をお借りして、このイベントを企画し支えてくださった主催の皆さま、先生方、学生ボランティア各位に感謝を申し上げます。

訪日の感想

広州大学
日本語学院　日本語専攻　3 年
劉詩穎

（原文中国語）

今回の訪日は、夢のような素晴らしい旅だった。

まず、コースのアレンジだ。にぎやかな東京都から、静かで親しまれる笠間市まで、松本城や稲荷神社が持つ文化的な景観から、壮麗な富士山や若葉竹林の自然まで、すべてを感じて、とても多様な日本文化を感じることができて、本当に完璧なスケジュールだ!

更にラッキーなことに、ルームメイトの金場ノエルさんは日本人の女の子だ。この八日間、最初はマスクを外すのが恥ずかしいくらい緊張していたが、ホームステイしている時は背中に伏せてリラックスして寝ていた。どんどん親しくなっていくのが実感できて、本当に優しくてかわいい方だった!

また、私は高野かずみさんが印象的です。私たちはロックが好きなのは意外な喜びだ。来日 4 日目に、ホテルの屋上に浴場サービスを提供した。私は中国の南に成長してきた女の子だから、かずみが思いやりにどうすればいいか教えてくれなければ、きっと引きこもるだろう。小雨の降る外湯で千海と語り合う楽しさも味わえないかもしれない。

また私の日本の親友の横山杏那と成功的に顔を合わせた!ホテルでももちゃんからの手紙を読んだ時、あまり感働して嬉しくて涙が出てしまった。

今回の訪日は本当に夢が実現した感じがあり、同時に新たなスタートを意味していると思う。この素晴らしい旅は私の心にずっと刻まれ、自信と勇気を与えてくれると信じている。

訪日感想

四川外国語大学
日本語学院　日本語専攻　3 年
李湘蓮

（原文日本語）

この一週間はきっと忘れられない思い出になると思います。みなさんと一緒に日本各地を巡り、現地ならではの光景や教科書に載っていない風情を味わい、驚き、笑い、涙などで溢れ充実した旅でした。

この旅で最も印象深かったのは、街の公共施設と民泊体験でした。お手洗いで消毒のスプレーが備えられ、冬になるとお湯が出てくる蛇口からベビーチェアまで付いています。また、メトロの駅内での ATM や自動販売機、歩道でのランナーへの注意など、細かいことから優しさと注意深さが感じられます。そして、民泊では、ホストの皆様から手厚いお招きをいただきました。洋子さんがショッピングモールを案内していただき、ご家族の皆様とご馳走を作り、夜 12 時までゲームをやり、中日のドラマやテレビ番組の話をしました。あまりにも楽しくて、一日があっという間に過ぎてしまいました。私がお笑い芸人のやす子さんの真似をしているところを見ると、おばあさんはすぐ「やす子がうちに来てるみたい」と言ってくれました。その後もよく私のことを「やす子ちゃん」と呼び、二人のチームメートに対しても面白いあだ名を付けてくれ、お陰様で皆すぐ親しみになってきました。チームメートの一

人の譚さんは日本語ができませんが、私が通訳したり、譚さんが翻訳アプリを使ったりして、ホストのみなさんとたくさん話し、たくさん笑いました。食卓で洋子さんと譚さんがそれぞれ自分の言いたいことをスマホに打ち、翻訳されたものをお互いに見せ、笑い合う情景を思い出すたびに、「みんな同じ、人間だもの」と、おばあさんの言葉が心の中に響き渡ります。たとえ言葉が通じなくても、届けたい気持ちがあれば、きっと届けます。

また、この旅で貴重な友情を得ました。アニメから始まり、アニメに限らず、日本人の友達と恋バナから人生の悩みまで、思い存分に話しました。共通しても真逆だって、異なる発想がぶつかり、語り合い、理解し合うことが本当にできるんだと、友達と手をつないで歩きながら思いました。

訪日の感想　一生ものの旅

北方工業大学
外国語文学　修士１年
蘇竟月

（原文中国語）

８日間の日本訪問の旅が瞬く間に終わり、かねてからの夢が現実になりました。日本語との縁ができたのは予想外だったと言えますが、そのおかげで人生の進路が大きく変わり、作文コンクールに参加して受賞に至ったのです。日本語を学んで５年近くの間、さまざまな日本語コンテストに参加してきました。多くは挑戦に終わりましたが、ずっと諦めませんでした。主催者の心がこもったコンクールにとても感謝しています。笹川杯作文コンクールで一等賞を獲得できたことで大いに自信が付き、引き続き日本語を専門に学ぶ決意が固まりました。また、私は日本語教師になろうと努めています。学生に日本語の知識や日本の人文などを講義して、中日の友好な交流を促進するつもりです。

人生にはたくさんの初めてがあります。今回の訪日は初めての出国、初めての日本です。この８日間の日本の旅は一生忘れられません。日本の文化をさらに理解できただけでなく、志を同じくする中国の仲間や日本の友人とたくさん知り合うことができました。旅の途中でガイドさんの話を聞くと学部１年の頃に戻ったような気持ちになりました。先生の日本での面白かったことと日本の風俗習慣のお話。そうした教科書で繰り返し学んだ文化や言葉がすべて目の前に現れたのです。また中国と日本の多くの違いをしっかり体験しました。ゴミ箱がなくて清潔な大通り、形がそれぞれ異なる建築物、温かい畳やコタツなど。

８日間の日本の旅はそれまでの旅行と大きく違うため、出発する前は不安があって落着きませんでした。みんなとうまく交流できないことを恐れていたのです。しかし後でみんながとても友好的だと気づきました。あるとき友人とドラッグストアで買い物をしたときうっかりレシートをなくしてしまい、各自の買ったものがいくらだったか覚えていませんでした

が、お店を離れた後でした。しかしその後、別のところで似たようなチェーン店を見つけ、先に買ったものがいくらだったか確かめようとしていたとき、若い女性店員さんが「お手伝いしましょうか？」と寄ってきました。事情を話すと、彼女は他店に連絡を取ってその状況を説明し、レシートが再発行できると伝えてくれました。しかし受け取りに行くにはやや遠いことを考え、彼女はそちらの店員にレシートの写真を送るよう頼んでくれたのです。「ありがとう、本当に助かりました。」とお礼を言うと、「いやいや、そんなことがないです」と答えただけでした。あの忙しい中で手伝ってくれたことには本当に感動しました。

行程の 2 日目は班に分かれての自由行動でした。私の班は 7 人中 3 人が日本人でした。3 人の案内で東京のあちこちを見学し、皇居、スカイツリー、雷門、浅草寺を巡って、最後に新宿でラーメンをご一緒しました。ずっと歩きながらおしゃべりしていたので、日本と日本人について理解を深めることができました。翌日は各班が前日の行程を発表し、それから中日の未来について想像を広げました。

主催者は民家に一泊して現地の住民と交流する機会も手配してくれました。普通の旅行だったらこうした機会はあり得ません。到着すると、合計 11 組の家庭が出迎えてくれました。それぞれに特徴があり、私のグループ 3 人は中国語のできる家庭に割り振られました。高齢のご夫婦で、ご主人の定年後に奥さんと当地に移住し、お二人で中国のあちこちを旅行されたことがあるそうです。家に入るとすぐ日本ドラマの中の暖かさを感じました。家中ちり一つなく、何もかも私たちのために 3 組ずつ用意してあり、おじいさん手書きの手紙をもらって、とても心が温まりました。お手洗いに行きたいと敬語で言えずにいると、おばあさんが「おかまいなく、自分の家だと思って」と声を掛けてくれました。

ご夫婦が心を込めて夕飯を用意してくれて、私たちも配膳を手伝い、日本家庭のリアルな生活を体験できました。3 月 3 日のひな祭りが近いということで、泊めてもらった部屋にはひな祭りの巻物が飾ってありました。ご夫婦は私たち 3 人を実の娘のようにかわいがってくれて、とても心が温まりました。

感謝を伝えるため、出て行く前夜に手紙を書いて真木先生の机に置きました。翌朝、ご夫婦が早起きして朝食を用意してくれました。起きると窓の外には雪が舞っていました。朝食後、ご夫婦が車で送ってくれました。名残惜しくてもお別れしなければなりません。バスに乗り、真木先生と奥さんが手を振って見送ってくれているのが見えました。窓の外では雪が舞っており、心にしみました。桜がほころぶ頃に再会したいです。

★「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2022. 2023」（中国語版）（8 名）
2022 年受賞者

訪日の感想

暨南大学
文学院　漢語言文学　3 年
譚碧雅

（原文中国語）

2022 年の大会に参加してから、2024 年に 50 人以上と一緒に日本を訪問したわずか 8 日間の旅程まで。バスで山野を巡り、繁華な都市を訪れました。東京では現地視察を行い、電車や地下鉄で新宿、浅草寺、秋葉原などを巡りました。また、衆知を集めて有益な意見を出し、青年の眼差しで 10 年後の「未来」をスケッチしました。その後、河口湖、松本、宇都宮でたくさんの美しい景色を見ました。雲が晴れた後の富士山、歴史ある松本城、緑の満ちあふれる若山農場。現地の特色ある美食と手工芸も体験しました。在来の南瓜、宇都宮の餃子と栗のケーキ、笠間焼などです。道中では多くの美しい景色も見られました。最後は笠間で現地の民家に泊まり、現地の文化を体験しました。

旅全体を振りかえると、まずはとても充実していたと感じます。スケジュールはびっしりで、日々の予定がしっかり設計されていました。文化交流、当地の特色ある体験など各種の体験はどれも異なっていて、道中では毎日のように新たな発見がありました。たくさんの異なる体験ができ、日本と中日の友好的交流に対しての学びもいっそう豊かになりました。特に、温かく仲が良い大集団の中で、多くの活動に共同参加しました。初日には焼き肉への情熱を感じ、2 日目と 3 日目には東京を漫歩して考えを発散しました。4 日目は富士山の下で撮影し、5 日目は若山農場で辺り一面の竹林を観賞……人の暮らしから自然の美景まで、道中は充実してとても幸せだったと思います。

次に、道中ではたくさん温もりを感じられたと思います。日本語ができない私は、たくさんの仲間に助けられて、話し手の意思をすぐに理解し、自分の考えや要求をリアルタイムに示すことができました。道中で多くの新しい友人と知り合い、これほどたくさんの場所に同行して、互いの楽しみと見聞を分かち合ったことは、今こうして思い起こしても目新しい体験です。笠間では都会の喧噪を離れ、温もりのある小さな家で住人と一緒にお寿司を作り、ゲームで遊んで、温もりのある平凡な日を過ごしましたが、深い余韻が残っており、思い出すとまだ感動します。人と人の交流には恐らく多くの障害がありますが、心の伝えるすばらしさと真心は満ちたりています。

最後に、晩冬に訪日団とすばらしく忘れがたい 8 日間を過ごせたことは、人生においてとても貴重な経験です。この旅で中日の友好的交流に対するたくさんの考えが啓発され、また日本の衣食住や習俗、人情についての理解が深まって、視野が広がり、より寛容で理性的な眼差しで現代と世界を見られるようになりました。春のような陽気から雨、そして空いっぱいの雪まで、天気はころころ変わりましたが、一行が共に受け継ぐ友好的な交流の信念はずっと変わりません。

私の目に映った多面的な日本

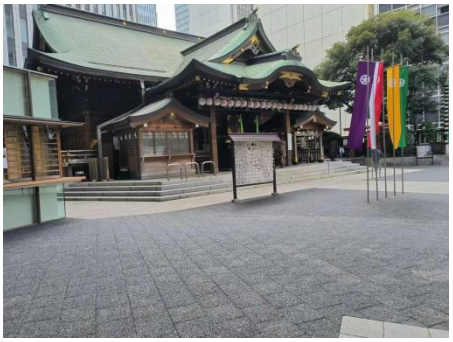
雲南大学
文学院　漢語言文学　修士２年
王一冉

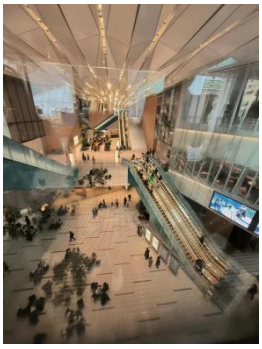
（原文中国語）

今回の日本の旅は東京の大都会から笠間市のひっそりとした田舎まで、歴史の刻まれた松本城から自然な奇跡を育む富士山までと多彩なものでした。豊富で充実したイベントの中で、異国である日本のさまざまな体験が得られただけでなく、日本の学生と深い絆を結ぶこともできました。

中国語が専門なので、それまでの日本に対する理解は作家の文芸作品によるものばかりでした。日本語は私にとって知らない言語のひとつで、日本という国さえほぼ知らないと言えるものだったのです。それが今回の貴重な体験で、特別な風景を味わうことができました。それまで想像を尽くしてもたどり着きようのなかった風景です。私の目に映った日本の姿はというと、友人と月を眺めていたときの彼女の「東京から笠間市まで 70 キロしか離れてないのに、まるっきり違う光景だったね」という一言が印象に残っています。これも日本がくれた絶妙な印象だったと思います。片や賑わうモダンな大都市、片やひっそりとした神秘的な自然の景観。片や高層ビルが林立し、何千便も集まる多機能な駅、人の波のわき返るオフィス街。片や静かで温もりのある集落の通り、伝統的な日本家屋、連なる開放的な田野。私の目に映った日本は多面的なものでした。近代的な発展に向かうと同時に、それぞれの地方が同じ方を向いていませんでした。東京の都市部でさえ、各所に独特な庭園の類が設計されており、位置や視点を変えると異なる景色を味わうことができました。高層ビルに囲まれた中に古色蒼然とした神社がぽつんと現れたり、ネオン灯の色彩の波間から鬱蒼とした木々や澄んだ池が覗いたりするのです。感じられる日本の文化と芸術も多面的なものでした。松本市美術館では、草間彌生の生命力に満ちた前衛芸術を味わって、須藤康花の絵に漂う古典の風格と死の美学に深く感服させられもしました。東京では、国際文化が集まって衝突し融合するのを感じられました。笠間では、江戸時代から伝わる民間芸術の笠間焼を見学して、日本の伝統的な文化と家庭生活の体験もできました。

今度の旅行ではとても忘れ難い思い出ができて、考えさせられることも多々ありました。発展して進む道の上で、中日両国の間にはたくさんの似たところがあります。両国民は密につながった歴史を持ち、また同じ未来の空を仰いでいます。多面的な日本を通じて、自身を顧みる鏡も収穫できました。両国の文化の交流と衝突を通じて、双方の間で深い理解と友好関係を築いてこそです！





訪日の感想

武漢大学
弘毅学堂　弘毅学堂　4年
白礼文

（原文中国語）

笹川杯の受賞者には日本で交流する機会があると早くから知らされていましたが、コロナ禍のため何年も旅程がキャンセルとなり、ほとんど希望を持たなくなっていました。そのため、日本旅行が再開されると通知を受けたとき、すぐには信じられませんでした。この８日の旅を振りかえると、今なお不思議に感じます。その中で特に印象に残ったのは、日本の都市建設と日本の青年との交流です。

日本の都市に対する印象をまとめると、清潔、整頓、静か、です。まずは清潔。東京の路上には吸い殻や紙くずのようなゴミがほとんど見られませんでした。通りにあるゴミ箱が少なくても、通行人がポイ捨てをせず持ち歩き、ゴミ箱を見つけてから捨てているのです。チームメイトと現地視察をしていたときおやつを買いましたが、食べ終わってからゴミ箱が見当たらないので、空き袋を手にずっと歩くほかありませんでした。それだけではなく、日本での人々の食事の習慣にも驚かされました。シンポジウムの時にみんなとレストランで昼食をとったとき、同じチームの日本人学生は食べ終わった食器を片付け、きちんと重ねていたのです。最初はたまたまかと思っていましたが、彼らと外で食事をすると、やはり彼らは食後にゴミを回収し、袋に包んでからゴミ箱に捨てていました。自分が国内で食事をしているとき、いつも卓上にゴミを残したままスタッフに片付けてもらっていたのを思うと、どうにも恥ずかしくなります。そのほか、東京の地下鉄も深く印象に残っています。中国の地下鉄は私にとって騒がしさの代名詞です。車内にはいつも大声で電話する人やスマートフォンで動画を流す人がいるので、私はノイズキャンセリングヘッドホンをわざわざ買いました。毎日の通学時に静かな空間を確保するためです。しかし東京で地下鉄に乗ったとき、車内はとても静かで、個々人がヘッドホンをして自分のことをしており、大声で騒ぐ人がいなかったため、とても快適に感じました。

シンポジウムでは3人の日本人学生とチームを組んで討論を行いました。当初は日本語ができないので心配でしたが、チームの他の学生はみんな日本語ができたので、彼らに訳してもらいながら、少しずつ討論に参加できました。交流が深まるにつれ、お互いに対する理解も増してきました。同じチームの森川さんはカナダ留学で多くの中国人と知り合ったそうで、中国語学習に励んでいます。友人と会ったときに中国語で交流したいのだそうです。また佐藤さんはお母さんが中国人で、彼女自身は中国語ができませんが、翻訳機を助けに、好きなアニメやゲームについて交流しました。中国語が一番うまい根岸さんは専攻が中国政治で、その後の現地視察では進んでガイド役を務め、午後半日を割いて浅草、銀座、新宿の有名スポットに案内してくれました。今回の交流では日本の青年に対する認識を改められただけでなく、日本の若い人に対する紋切り型の印象を打ち破ることもできました。雑談や視察の中で、お互いの共通点が想像していたより多く、みんな善良で友好的だということが次第に分かりました。動画共有サイトの投稿者の山下智博さんがシンポジウムで言っていたように、「中日友好」はあまりにも広範な概念で、より重要なことは両国の同年代の人が親友になってお互いに対する理解を進めることであり、マクロレベルでの「友好」に貢献するにはそうするしかないのです。

今回の日本の旅では、日本の都市の風景を遊覧し、田舎の民間生活を体験しただけでなく、中日両国の友人がたくさんできて、最高のお年玉だったと言えます。

訪日の感想

雲南大学
文学院　比較文学と世界文学　修士3年
李関月

（原文中国語）

8日間の日本を訪問する旅が完璧なピリオドを打ちました。初めて日本の地に足を踏み入れて、ドラマやアニメで見ていた景色や建物を目の当たりにし、本場の伝統的な日本の美食を味わい、そして初めてリアルな日本人に触れ理解することができました。たくさんの「初めて」の嵐の中で、異なる国の文化の間にある直接の交流と衝突を深く感じました。驚きの陰に隠れたカルチャーギャップに激しく揺り動かされてさざ波が立ち、脳裏で拡散し続け、未来に対する思索に影響しています。

2月17日の午後2時頃、長旅を経た私たち一行がようやく池袋に到着し、8日間の日本訪問の旅が始まりました。池袋では「未来の生活、私たちが実現」と題した第4回中日未来創発ワークショップがありました。その後、松本で美術館と日本の「国宝」松本城を見学。翌日は宇都宮で餃子づくりの楽しみを体験し、若山農場で竹林の趣ある静謐さを感じました。笠間市では稲荷神社を見学後、グループに分かれて現地の民家に投宿し、日本人のリアルな生活に溶け込みました。最後に東京に戻り、新宿で最後の旅程に微力をささげました。

池袋は都内の繁華な商業地区で、大通りはにぎやかで慌ただしく、巨大な広告看板とネオン灯がきらめき、SF 撮影現場のようでした。自分が知っていた街のイメージとは似ていたもののまるで違い、細かいところによそ者の疎外感が漂っていました。ひっきりなく流れる車は左側通行で、中国のような右側通行ではありませんでした。通りは清潔でしたが、だいぶ歩いてもゴミ箱を見つけることはできませんでした。道の両側の建物はずらりと並んで、ビル同士の間隔が中国よりも狭く、「肩がぶつかる」ほどのところもありました。しかしそのビル群は摩天楼ではありません。居住区では低層住宅群が多く、黒山のような電線が空中に張り巡らされていましたが、乱雑さを感じることはありませんでした。夜 9 時頃、商業施設では来館者に退館を促す放送が何度も流れ、表門が時間どおり「ばん」と閉まりました。この厳格に規定が実行される感じは「フクロウ」な私にはなじめないものでした。

こうした疎外感となじめなさは、結局やはり似ているものの実際には違いのある両国の文化が原因です。18 日の班行動では、明治神宮を見学しました。中国では、寺社の境内に立ち入るとき、扉を開いて敷居をまたぐ習慣があります。そうした光景は開封市の大相国寺などでよく見られます。しかし日本では、そこに神社があると知らなければ、高い鳥居をそのままくぐってしまうかもしれません。参道や拝殿を目にしたとき、そこが神社であることにはっと気づくのです。鳥居の高さは、日本文化における自然への崇敬と関係があるのかもしれません。自然の景観の中で、高くて大きい構造は、周囲の木、山岳などの自然の要素とよりうまく解け合い、調和が取れ統一された間隔を醸し出すことができます。このような設計は自然への尊重のみならず、日本人の自然環境と調和した共存の理念をも明らかに示すものです。なので、神社で日本の伝統的な婚礼の儀式を見かけたときすぐ理解できました。こうした環境の中で婚礼を挙げることは、新郎新婦と来賓が自然の美しさの中に浸れるだけではなく、日本人の自然に対する畏敬を体現しているのです。比べると、中国の伝統的な寺院では厳かで重々しい建築の風格が重視され、敷居は俗世と仏の国の境界線と見なされており、敷居を越えることは魂の浄化と昇華を象徴しています。結婚式は俗世の産物であるため、おのずと寺院では見られないのです。このようなカルチャーギャップは、両国の宗教、自然、そして人と神の関係における理念の違いを体現しています。

文化の相違性は、両国の人と人との交流や付き合いの中にも体現されています。日本では、人と人との付き合いにある種の「距離感」が感じられます。バスを乗り降りするときの運転手に対する挨拶、グループメンバーの間での問題の探求、日本のルームメイトとの軽いおしゃべり、いずれをとっても相手の真剣で礼儀正しい態度に、やや気ままな私も「襟を正し」始めてしまいます。最も典型的だったのは日本のルームメイト高野さんです。こちらが気の向くままに話題（中国語混じりの奇怪な日本語）を振る度、持っているものを手放して、じっとこちらを見るのです。一瞬、つっこもうと思っていた私が口をついて出るはずの言葉を考え直さざるを得なくなります。写真を撮るときもそうです。日本の学生は集合写真を撮るとき、人と人の間の距離があまり近くなることはありません。男子と女子で撮るとなると、前後にずれることさえあります。しかし中国では、よく遊ぶ女友達と頬擦りもすれば手をつなぐこともあり、街をぶらつくときも腕を組んでいますが、日本の街角では確かにそれほど「親密」な友人はほぼ見られません。しかし困惑させられたのは、こうした「距離感」と矛盾して、酒井先生宅に泊まったときの「親近感」です。酒井先生は私たち 3 人（高

野さん、管さんと私）を温泉に連れて行ったとき、番頭さんに「私の娘たちです」と言っていました（笑）。中国ではおじいさんやおばあさんなら言うかもしれないような話です。

こうした微妙で深いカルチャーギャップの中で、心が打たれ精神的滋養をつけることができました。毎日の経験は心の中に橋を架け、中日両国の異なる文化の景観をつないでいくように感じられました。この多様な文化の織りなす世界の中でいかに自分の位置を見つけだし、学んだこと、体験したこと、感じたことを交流の橋に変えていけるか、考え始めたところです。今後は、自分がどこにいても、今回の日本旅行の記憶は価値観を構築する上で不可欠な部分となっており、異文化を理解し尊重する礎石になるのだと思っています。

2023 年受賞者

未来へ

寧波大学
人文メディア学院 中国語文学　修士 1 年
潘俊杰

（原文中国語）

ACG 文化と日本文学を好んでいるため、日本という一衣帯水の隣国は、遥か遠い夢影のように、よく脳裏に浮かんできます。この機会のおかげで自ら日本へ向かい、この夢の中の「異国」に実際に触れ、たくさんの違う「景色」を見つけることができました。

到着した初日、高橋会長が昔の記憶を話してくださいました。彼は 17 歳のとき初めて渡米し、そこからの人生が変わったのだそうです。話は期待へと続き、今回日本を訪問する各位も五感を十分に引き出して、この特別な旅を味わってほしいとのことでした。私はと言うと、言葉の壁が存在するとしても、光り輝くすばらしい瞬間はなお有り余るほどで、一幕一幕が目の前できらめいていました。雪化粧した富士山、厳かさがあり古風で質朴な松本城、静寂な深緑の竹林、笠間の温かい住民と舞う粉雪、東京の繁華な喧噪……これらの瞬間を行き交う日本のさまざまな側面の「光景」が次から次へと広がって、ますます新鮮みを感じ小躍りしてしまいます。

体験のほかに忘れがたいことは、山下智博さんの中日関係に対する新しい解釈です。「中日友好」には「中日好友」から始めるのがよいとのこと。たとえ誤解が存在するとしても、中国人と日本人が親友になって、積極的に疎通できるならば、「心の壁」の隔たりを次第に取り除き、温情と理解を増進して、すばらしい未来を共創できるというのです。

今回の日本訪問はあたかも「縁の結び目」のようで、そこで出会い、一期一会、誠実な友情を結ぶことができました。日本の青年と交流し協力して、共に未来を広げ、文化をまたいだ火花を出すことができました。旅は終わりましたが、これらの新しい「景色」、めぐり会い、感動はすべて一生の思い出として、遙か遠くの未来へと共に向かいたいと思います。

訪日感想

南開大学
外国語学院　3年
王奕博

（原文中国語）

8日間の訪日の旅はまたたく間に終わりましたが、永久の友情と固い自信を獲得しました。

日本は2回目ですが、日本の学生と深く交流したのはやはり初めてです。訪日の間、出身や背景の異なる学生と交流し、そこには中国から日本に留学している学生も、日本の大学生、高校生もいました。

日本の若い友人たちと一緒に、中日両国の未来の発展の方向を探求しました。交流では、私たちの世代は中日の友好関係に対する情熱と希望に満ちていると感じられ、中日の友好的な交流についての自信がいっそう固まりました。

交流討論のほか、東京の街を共に歩き、双方の生活環境の違いを感じました。高層ビルから民家や寺社まで、現代的商業施設から街角の小さなお店まで、双方の違いを話し合い、驚きや感慨を述べました。出身地こそ違っても、身の回りの環境を保護して大切にするのは共通です。時代の発展につれて、身の回りの様子が絶えず変わることに慣れてしまい、東京の多彩な都市景観は、双方の未来に対する気ままな想像を豊かにしました。

印象深いのは、訪問の終了後にWechatのグループで、去年のPanda杯受賞者の前原さんが書いていたことです。間もなく大学に入る彼は、Wechatというこの「新興の事物」で個人の楽しみと未来の構想を表現してみるのだそうです。喜んで「いいね」して、そのうちまた中国においでとコメントしました。この「いいね」やコメントの数々が友好的な中日の未来を作れればと望みながら。

富士山の下で友情はとこしえに

北京大学
哲学系 中国哲学　3年
王敬淇

（原文中国語）

「笹川杯『本で味わう日本』作文コンクール」で日本へ行って遊学する機会を獲得できたことはとても幸運でした。コンクールに参加したのは、図書館から告知メールが来たとき、

日本に関係する本を読むのも悪くないなという気持ちで長からぬ文を書いただけでしたが、本当に日本を訪問して交流する機会を獲得したと知らされると、何もかも夢に彩られた予想外の収穫でした。日本の日本科学協会、笹川平和財団、上海交通大学図書館、北京大学図書館といった各組織団体、関わったスタッフの皆さんには、コンクール参加と訪日の過程でもろもろお気遣いいただき、心から感謝しています。

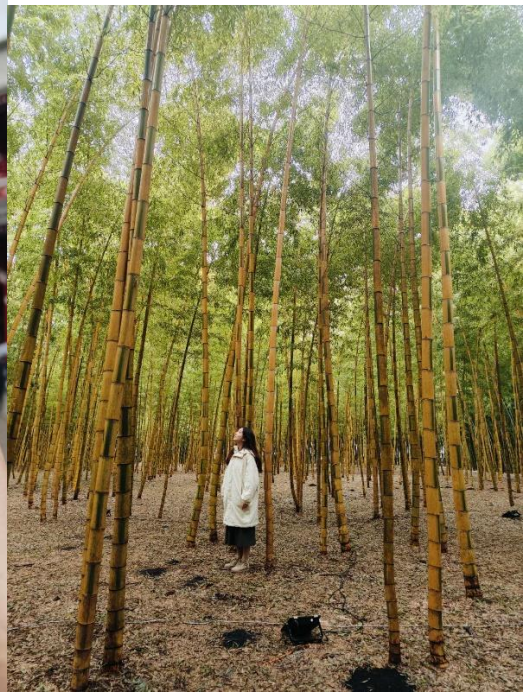
今回の訪日交流で最も印象深いのは、富士山を代表とした日本の特色ある絶景、そして富士山の下で中日両国の友達と交流し付き添った深い友情です。

道中では赤白に配色された東京タワーが見え、東京の晴れ渡った青空と非常に美しい都市の景観を構成していました。観光客がたくさんいる浅草寺、増上寺、稲荷神社といった宗教施設の見学では、都市生活と高度にからみ合った宗教文化を感じました。日本の仲間の案内で新宿御苑に行くと、心をこめて剪定された花と木の下には遊覧客で「埋め尽くされた」黄色い芝生があり、そこに加わって、そよ風の中で中国語と日本語をまぜこぜにして談笑しました。河口湖のほとりから遠くの富士山を眺めると、富士山の気質は静謐にして清浄で、日光を反射してできた無形のハロは人の心のすべての隅を照らしているかのようでした。若山農場の竹林では、しとしとと小雨が降っており、その中をそぞろ歩きしてお茶を味わうと、お茶請けの栗菓子がとても甘く、そうしたどれもが特別な思い出です。その過程で、同行した中日両国の友人といっしょに美しい景色を楽しみ、美食を味わい、経験を分かち合い、未来を語り合いました。

青空の下の東京タワー

新宿御苑

浅草寺と人形焼



若山農場の竹林

河口湖のほとりから臨む富士山

中日両国の友人で構成された「東京 02」班

笠間市では日本の田舎に入る機会もあって、現地の民家に泊まるすばらしい体験ができました。総白髪ながら壮健なおばあさんが私たち５人を温かく出迎え、林間の小屋に連れて行ってくれました。童話の世界、童話の世界のおばあさんの小屋は初めてです。おばあさんは赤いセーターに青いスカートで、私たちにはできない可愛らしい表情をして、追いつけないような健脚で、すごいスピードで運転していました。料理がお上手で、わざわざ歓迎の絵を描いてくれて、戸棚を作ることも、ヒョウタンスピーカーを作ることも、動画編集もでき、柑橘を栽培して缶詰にしたり、流ちょうな英語を話したり……彼女はペチカの前で白いプリントの敷物に膝をつくと、火をおこして柴をくべました。パチパチという音は火炎の成長する音のようで、目に見えない温もりが一つ一つの毛穴にしみ通るようでした。別れるとき空にはガチョウの羽のような雪が舞っていました。おばあさんは雪の中でバスにずっと手を振ってくれていました。彼女から車内が見えないのも私たちがどこに座っているか分からないのも明らかでしたが、それでも信念に満ちていました。その時のその場面は、国籍、言葉、年齢、関わった時間の長さに関わらず、人の感情はきっと誠実さにより通じ合っているのだと信じさせてくれました。

富士山が見えた人は祝福された幸運児だと聞いたことがあります。富士山に行った日は予報では雨続きでしたが、旅が進むにつれて奇跡のように空が晴れ上がり、富士山はその明るい姿でそれぞれの方向に現れました。富士山が見えた人は祝福されているのであれば、共に富士山を目にした友情もきっと祝福されています。中日両国の友人の友情が、この８日間のすばらしい追憶ともども清らかにずっと残りますように！

美を知る

南京工業大学
法政学院 行政管理　１年
楊東林

（原文中国語）

「風流、つまり、存在する美を発見するにも、発見した美を感得するにも、……」川端康成

は『美の存在と発見』の中でこのように述べています。

この 8 日間の日本訪問の旅で、風流と認識し合わないわけはなく、美と互いに感知しない道理もありませんでした。

日本を訪れた最初の日、私たち一行は味のある焼肉屋で舌鼓を打ち、その間に日本科学協会の高橋会長や先生方、先輩方から講話がありました。「初めて出国したのは 17 歳のときで、一生の記憶に残る体験をしました。皆さんの中にも初めて出国した人、初めて日本に来た人が多いでしょう。この旅は無駄にならないと思います。」高橋会長の言葉に心を打たれました。今回の訪問はまさに 18 歳の自分にとって初めての出国です。期待、感動……様々な感情が激しくぶつかり合う心と共に、続く 7 日に向って足を踏み出しました。

風習の美と出会う旅でした。松本市では日本の国宝に数えられる松本城を見学し、笠間市では稲荷神社を見学して、笠間市民と一晩を共にしました。かなり有名な名所、生活感のある民家、はたまた都市の幹線道路、大通りと路地を問わず、文化、習わしの共通点、あるいははっきりとした違いが徹底的に現れていました。「美しきものはそれぞれに美しく、共存しうる」という文化の多様性の生き生きとしたイメージが目の前に現れ、見事でまた深いものでした。

自然の美と出会う旅でもありました。それまで富士山は永遠に遥か遠く、ウェブサイトの写真だけの存在でしたが、こうして河口湖から自分の目で見ると、川端康成の『雪国』での一節「天の河の明るさが島村を掬い上げそうに近かった。 旅の芭蕉が荒海の上に見たのは、このようにあざやかな天の河の大きさであったか。裸の天の河は夜の大地を素肌で巻こうとして、直ぐそこに降りて来ている。恐ろしい艶めかしさだ。」をふと思い出しました。そう、さながら富士山は大自然の入神のわざで創造された貴重な宝、山頂を尖らせる雪は、あざやかな天の河の光なのです。若山農場の果てしなく広がる竹林、各種の交響曲も時間を忘れさせ、名残を惜しませてくれました。

情誼の美と出会う旅でもありました。2 日間の「中日未来創発ワークショップ」では各チームの活気あふれる中、日本の学生達とチームを組んで交流と探求を行い、現地視察で親しくなりました。全体の見聞の途中、訪問団一行の学生達は相互理解を深め、あの毎日の談笑と友情の雰囲気は本当に忘れられないものです。道中ずっと案内してくださった日本科学協会の担当の先生方は私たちの身になって考えて、最高の体験をさせてくださいました。先生方が示されたのは責任感だけでなく、親切心でもあったと思います。

「蛤のふたみに別れ行く秋ぞ」時間の車輪はいつも情け容赦なく回り、8 日間の日本への旅は終わりましたが、熟知した後の美は私の心にずっと残っています。

★「笹川杯日本研究論文コンクール 2022. 2023」（5 名）
2022 年受賞者

訪日の感想

清華大学
人文学院、外国語言文学学部　修士 1 年
李鋭

（原文日本語）

この 8 日間、日本科学協会をはじめとする日本の方々、そして訪日団の邱先生、陳先生、于先生などのご支援、ご協力をいただき、誠にありがとうございました！

日本を訪れるのは初めてであり、文化の違いによる誤解などもあったかもしれませんが、ご理解いただけると幸いです。

さて、訪日の感想について述べさせていただきたいと思います。高橋会長のおっしゃる通り、異文化体験は人生においてとても貴重な宝物です。当時わずか 17 歳の高橋さんは渡米し、ホノルル、サンフランシスコ、ニューヨークなどの都市を訪ねられました。それも高橋会長の初めての海外経験でした。

日本語を勉強して以来の四年目、私はやっと訪日のチャンスをいただきました。コロナの原因で訪日が 2 年遅くなったにもかかわらず、飛行機が着陸した瞬間の感動はかつてないほどに印象深かったです。それは訪日が実現されたからというより、むしろ高橋会長のように「異文化」との交流ができるからだと言えると思います。教科書で勉強したものがすべて通用するとは限らないことに気づき、語学力をもっと研ぎ澄まさなければという思いもありました。しかし、自分が知る限りの言葉で伝えるとともに、相手も耳を傾けることは、言語の領域をはるかに超えて、相互理解や尊重を基盤とした異文化コミュニケーションに達することに気付きました。それは、山下智博さんが講演で触れた「『中日友好』よりまずは『中日好友』」と共通しているところがあります。何よりも相手に対して理解しようとする好奇心、そして相手に理解されるように努力するという心構え、言い換えると、いつも変容する世界においても、未知に向かう勇気を持つことでもあります。そのことを今回の訪日体験で深く認識したため、今後一番大事な、一生忘れられない贈り物として大切にしたいと思います。これからも中国と日本の文化を十分理解し、両国の架け橋として、中日の民間交流に自分の力を尽くしていきたいと思います。

改めて感謝いたします！また日本か中国でお会いしましょう！謝謝！

訪日の感想

北京外国語大学
日本語学院　日本語　4年
白易之

（原文中国語）

8日間の日本訪問で、日本に対する認識を十分に深め、日本の美食をたくさん味わい、たくさんの日本の景色を見て、たくさんの日本の友達と知り合いました。日本の建築物の姿に感慨を覚え、日本の景色の美しさに感嘆して、中日両国の文化の伝承と交流に驚嘆もしました。日本語を専攻する学生として驚く発見もあり、本で学んだ日本語は現実的な生活の中の日本語と全く違っていて、口にしにくくなりました。日本への憧れが芽生え、会話能力も鍛えられて、今回の日本訪問イベントには感謝しています。また日本を訪れ「山川異域、風月同天」を味わう機会がありますように。

中日友好の橋をかけよう

上海交通大学
外国語学院　日本語学部　4年
胡凌鋒

（原文日本語）

2月17日から24日までの八日間、論文コンクールの受賞者として私は日本科学協会・笹川平和財団に日本まで招かれ、楽しく有意義な時間を過ごすことができました。人生初めての日本行きですが、「旅行」や「見学」としてではなく、「訪問」あるいは「交流」であることを実感しました。学んだことを活かし、中日友好の橋をかけるように頑張って行きたいと思います。

今回の訪問で、最も印象に残った時は日本人と一緒に話し合い、笑い合う時です。二日目と三日目のワークショップでは「私たちが実現したい未来」というテーマをめぐって、三人の日本人の大学生と仲間になって交流し合っていました。電車に乗り、町を歩き、回転寿司の店で夕食を…途中で彼らと一緒に見たもの、聞いたものは何でも新鮮で、日本という国は何だ、日本人の生活は何だといった疑問を一つ一つ解けてくれました。なるほど、日本という国はこんなに活気に溢れていますね、日本の青年はこんなに熱意をこめて外国人の私たちと話し合っていますねと、私はすごく感心しました。そして、最後の発表でチームで「サイバー神社」というアイデアを発表しました。宗教、民族は異なりますが、人である共通の性質は変わりません。東アジアに住んでいる中国人と日本人は必ず友達になれる、「中日友好」という信仰もきっと同じであると信じます。

そういう信仰は笠間市に行われた交流活動からも実感しました。22日、私は笠間市内桶議員の家で一泊のホームステイを体験しました。地元の観光事業の促進に努めている内桶さん

は私が所属した男子三人のグループを親切に接待しました。それに、笠間市の名物である栗と笠間焼をいただきました。中国にはないことばかりでした。中国でも焼き物がありますが、笠間焼より重いと感じます。どちらかといえば「剛」です。それに対して日本の笠間焼は「柔」です。そういえば、中国人の性格も「剛」であり、それに対して日本人の性格は「柔」だと感じました。大まかな中国人は笠間焼のような焼き物は作れません。色の濃く染付の焼き物を作ってきました。話し方が婉曲的である日本人は質素で軽く笠間焼を作ってきて私を感服しました。もし中国と日本の職人が一つのチームになって、「剛」と「柔」が一つになったら、作り上げた焼き物はどうなるのでしょうか。中日友好という一つの信仰で、さらなる文化交流も期待しています。

中国人と日本人は同じく東アジアに住んでいます。そして、同じ未来を期待しています。私たちは共通の「中日友好」信仰を持っているということは決して忘れてはなりません。中日友好の橋をかけましょう！中日友好を促進するよう、自分の一生の事業とし、頑張っていきたいと思います。

2023 年受賞者

日本の心、美と交流の旅

上海交通大学
外国語学院　日本語学部　4 年
王璐児

（原文日本語）

先日、笹川杯日本研究論文コンクールの受賞として、日本に 8 日間招待していただき、とても光栄に存じます。日本を訪れるのは、今回で四回目ですが、毎回行くたびに異なる感じがします。日本の多様性、文化の美しさ、そして人々の温かさに触れることができ、これらの経験は私の心に深い感動を残しました。

初めの三日間は東京に滞在し、日本の優秀な大学生と「日中未来創発ワークショップ」に参加させていただきました。大学生との交流は非常に意義深いものでした。日本の大学生たちは非常に親しみやすく、交流も思ったより順調に進んでいきました。言葉の壁があったものの、お互いに助け合いながらコミュニケーションをとることができ、異なる文化や価値観について深く理解する機会となりました。彼らの真摯な態度や努力に触れることで、日本の若者たちの誇り高さと熱意を感じることができました。最後の発表で、みんなで演じた紙芝居は、面白さと明白さにより、好評をいただきました。リーダーとして、とても嬉しく思っております。

東京の魅力もまた、言葉に尽くしがたいものがありました。忙しさと静けさ、伝統と現代性が共存する都市の雰囲気に圧倒されました。東京タワーや浅草寺、渋谷の若者文化など、

様々な顔を持つ東京を巡ることで、日本の歴史と未来を同時に感じることができました。また、大学生たちと共に過ごした時間は、都市の中でのリアルな日本の生活を垣間見ることができ、日本の文化への理解が一層深まりました。

松本城への観光も、日本の歴史と伝統に触れる素晴らしい機会でした。城内の美しさと風格に圧倒されると同時に、歴史的な背景や城の建築に込められた意味に感動しました。ガイドさんから聞いた城にまつわるエピソードは、その場所の重要性を深く理解する手助けとなりました。松本城の美しさは、日本の歴史と伝統がどれほど深く根付いているかを象徴しているように感じられました。

ギョーザ作りの体験は、日本の食文化に触れる素晴らしい機会でした。宇都宮市の手作り体験基地で、伝統的な技法を学びながらギョーザを手作りすることができ、そのプロセスは非常に楽しかったです。食材の選び方や包み方についての細かな指導を通じて、日本の料理の奥深さを理解することができました。その後、自分たちで作ったギョーザを一緒に味わう時間は、地元の味覚に触れつつ、団結感を感じる素晴らしいひとときとなりました。

笠間市の民宿での宿泊も、日本のおもてなしの心を感じることができた重要な経験でした。親しみやすい地元の人々に囲まれながら、伝統的な和室での滞在は、日本の文化に触れつつ、リラックスできる時間を提供してくれました。地元の食事や習慣に触れることで、日本の地域ごとの特色や個性を実感することができ、これが旅の醍醐味でもありました。特に印象深かったのは、泊まった民宿の娘さんは、情熱的にマッサージをしてください、体の筋に関する知識もいろいろ聞かせて、実用性が強いリラックスの方法が身について、とてもありがたく思います。

総じて、日本での滞在は私にとって非常に意義深く、貴重なものでした。大学生との交流や地元文化の体験を通じて、日本の多様性や深い歴史、そして人々の温かさを感じることができました。これらの経験は、私の視野を広げ、異文化理解を深めると同時に、日本への尊敬と興味を一層高める絶好の機会となりました。今後も、この素晴らしい国について学び、理解を深めていきたいと思います。

感想

吉林大学
外国語学院　日本語学部　3年
譚小妍

（原文日本語）

今回の旅を通じて、今まで想像した日本が実在していることに驚きました。アニメや漫画などで触れた景色も自分の目で記録することでき、とんでもない幸せを感じました。

８日間、日本人のボランティアさんに案内され、たくさんのスポットや観光地に訪れることができました。都心部にある賑やかな商売街にせよ、田舎の落ち着いた畑にせよ、日本の光景によって魅了されました。

笹川平和財団ビルで行われたワークショップを機に、日本人のパートナーと一緒に都内散策し、上野・秋葉原・東京駅・皇居などのところに近寄り、すべてもこの目で覚えたいっと言っても過言ではありません。日本の路面は非常に広いっていうのは、道に歩いた時に最初に気づいたことです。そして、信号は韓国と同じく色標識を採用し、特別な表示方法なので、国内で使われていません。帰国する時、信号どころが、左側通行さえ馴染んできました。

３日目、山梨に行きました。富士山は真っ白で、雪はまだ溶けてないまま、青空の下に雲を被り、和やかな雰囲気でした。撮った写真を何の加工もせずそのまま友達に見せると、向こうも興奮しちゃってしまい、すごくきれいってコメントしました。

その後松本市美術館に見学。須藤康花は闘病生活の中で芸術を借り人生を表現し、矛盾・葛藤に満ちた絵に印象深かったです。でも、一番印象に残ったのは笠間市で人生トップのモンブランを食べたことです。あっさりした甘栗とクリームが調和よく、感動させられました。その日、地元の青山さんの家に一晩泊まらせました。ホームステイの初体験に対し、最初は心細かったんですが、幸い青山さん一家が家族のように接してくれました。

旅行の意味は自分の新しい可能性を見つけることにあるのではないでしょうか。今まで出会ったことのない物事に気づき、自分を造形していくのに道を開いてくれると思っています。中日の友好関係にとって、若い世代の思考と視点は必要なものとされるようになりました。今回の訪日をきっかけに、両国の架け橋になるという志向が強くなってきて、これ以上もっと日本と触れ合いつつ、新しい自分と新しい両国未来に出会うため、頑張っていきたいと思います。

★「Panda 杯 全日本青年作文コンクール」OG 訪日団同行メンバー(4 名)

2024 訪日団同行感想

獨協大学
国際教養学部 言語文化学科　1 年
金場ノエル

私は、今回の訪日団に同行し、日本と中国の両国を、新しい視点から見比べることができたと感じています。

8 日間の訪日において、中国の学生のみなさんは、私が普段何の変哲もないと感じているものに興味を持ち、その多くを写真に収めていました。

例えば、2 日目に行われたフィールドワークでは、秋葉原にある大きなアニメの看板や、東京駅の歴史ある風貌、更には電車の電子広告まで、すべてに目を輝かせていました。その様子は、私が初めて中国に訪れた時と全く同じで、私も中国の街に溶け込む最新技術を、どうにかカメラで捉えようと必死になっていました。

各観光スポットでの自由時間においても、学生の皆さんそれぞれが有意義に時間を使い、買い物や観光を楽しんでいたようでした。そのため、バスに乗っている時間や、ご飯を食べている際には、どんなことを体験して驚いたか、どんなことが中国と異なっているかを教えてくれました。

ある学生の方の話を聞いている際に出た「私たち若い世代は、中国という国を色んな視点から見ようとしています。」という言葉は、特に印象的です。

ただ日本と中国を比較するのではなく、互いの良い点や改善点を考え、未来の発展に繋げようという姿勢がうかがえました。私にとって、自身の祖国である日本という国の未来を考えることができているのか深く考えさせられた言葉です。

ただ楽しいだけの訪日ではなく、両国の若い世代の意見交換をすることができた、そんな意義深い 8 日間であったと感じています。

久遠のつながり

同志社女子大学
表象文化学部 英語英文学科　1 年
田中　玲名

今まで私は価値観や文化などの違いで中国人と日本人が分かり合えることなど決してないだろうと考えていた。しかし、今回の８日間の交流を通して、国や言語の壁を越え、友達になり肩を組むような関係を作り、お互いに助け合い通じ合えたと実感できた。私は訪日団が来る前から、バスの中で行うレクリエーションを企画するために、日本科学協会の方と有志の中国人の学生さんたちと協力して計画を進めていた。そこでも、彼らに助けられた部分が

多くあった。レクリエーションではどの催しから始めるか、どんな催しなら全員が楽しむことができるのかについての助言をしていただいた。また、進行する際に使う原稿を事前に作成していただき、旅行前までに完成することが難しいであろうと思われていたが、彼らの助けにより完成させることができた。そして迎えた旅行当日、初めこそはお互いが緊張してあまり打ち解けられなかったが、衣食住を共にすることによって馴染むことができた。今回の旅の中で多くの友人を作ることができたのはもちろん、中でも親友とも呼べるような友人をつくれたことがとても嬉しかった。今まで、交換留学生やサークルの活動で留学生と話す機会は多々あったが、今回のように本音を言い合える友人関係を築き上げることまではできなかった。ゆえに短い期間ではあったが濃密した時間を彼らと過ごすことができて、忘れられないものとなった。同時に、彼らや中国をさらに理解したいと思うようになった。今回は日本語がわかる学生が多かったものの、一部の学生は日本語を学習していないので意思疎通が十分でない場面が多くあった。そのため、行き違いになることもあり悔しい思いをした。ワークショップの講演で山下さんが日中友好を達成するのに近道なのは中国人の友人を作ることだとおっしゃっていた。今回の旅行で多くの友人を作ることは達成できたが、言語面においてはまだ未練があるので勉強に励みたいと思う。

訪日団感想文

立命館大学
文学部 人文学科　４年
望月　　泉

今回訪日団に同行させて頂いて印象に残っているのは、東京フィールドワークです。始めて日本を訪れた日本語専攻の中国人学生さんが移動中の電車内で英単語帳をめくる通勤中の日本人男性に話しかけていました。どうして電車内は静かなのか、なぜ勉強しているのかなど素朴な疑問を尋ねていました。私も初めて中国を訪れた時は目に映る全てが謎だらけで友人を質問攻めにしたことを思い出しました。当人にとっては当たり前であることでも国が変われば視点が変わり珍しく見えるのだなと改めて感じました。現地の身をもって得た体験はネットの情報や教科書以上に鮮烈で刺戟的なものです。中国のことわざに读万卷书，行万里路があります。これは本をたくさん読み、旅をし知識を積むという意味のことわざです。座学だけでなく体験も大切にすることが今後必要になってくると感じます。今回の訪中団ではこのような体験をした方が多くいたのではないでしょうか。

朋友は海を越え

岡山大学大学院
社会文化科学研究科 日本・アジア文化専攻 2 年
高野かずみ

2 月も後半、ここ日本に中国からの訪日団総勢 40 名が降り立った。彼らに随行するべく東京へ赴いた私は実に面白い一週間を過ごしたのである。全員が煌めく個性を放つなか、殊に燦然と心中に残る 2 名の学生が居た―私は今回、この二人を通じて訪日旅程を語らねばなるまい。

まずは李さん、彼女は全日程でホテルが同室であった。初日の夜、ホテルに着くとまさかの事態―中国人学生と二人部屋ですか？―もとより他者との生活を極端に忌避する私、本来なら「金を払うので一人部屋に変えてくれ」と申し出たろう。茫然と立つ私に対し、彼女のほうから笑顔で最初の挨拶を掛けてきた。「你好！」……奇妙なことに、その瞬間から一週間を共に過ごしたいという思いが芽生えたのだ。その奇妙な欲求はすぐに実を結んだ。お互いに相手の言語を流暢に話せはしなかったが、ゼスチャーや漢字による筆談が会話を大いに活発なものにしてくれた。言語の壁があろうと、相手と一対一の真剣な交流を図ることは可能なのだ。「我々の間にそびえるバベルの塔は心の通じ合いにより融解した」。彼女はそう喩える。

そして二人目は劉さんである。実は訪日前より個人的な交流があった。私の微信に戸川純の投稿があったからだという。好きな音楽やアーティスト等々、ディープな趣味の話で盛り上がった。旅程で常に同行することは叶わなかったが、折に触れて交流を深めることができた。最も印象に残っているのは彼女曰く人生初めての大浴場・露天風呂―特に中国南方の人々からすれば所謂（いわゆる）“裸の付き合い”は奇妙なものに映るという。しかし我々は小雨の降るなか熱い湯に浸かりつつ、徐々にお互いの心の奥底まで語らう時間を過ごしたのであった。お互いの生い立ち、人生観、これからの展望。これほどまでに腹を割って話せた人間は日本人でも居ない。胸に強く刻まれた思い出の一片である。

以上の二名との交流を顧みすれば、「朋友」を「同胞」と置き換えても好いように思う。母国は違えど、はるばる海を越えて出会った我々は、あらゆる状況をも超越して強固に結ばれる友人となれたのだから―